VIEW21

2011 October

10月

高校版

Volume 4

CONTENTS

2 私を育てたあの時代、あの出会い

生徒が考え、自ら成長する「理想のクラス」を追いかけて
徳島県立名西高校◎河野豊司

4 特集

学力を伸ばし、志望を深める志望校検討会

6 課題整理 志望校検討会の現状と課題

8 学校事例❶ 長崎県立佐世保南高校
生徒資料の充実と事前検討会の工夫で教師の意識改革を図る

12 学校事例❷ 静岡県立富士高校
校内実力テストの分析で生徒の伸びしろを見極め指導の平準化を目指す

16 インタビュー 志望校検討会は「学校力」が試される場
栃木県立石橋高校校長◎塩野谷英彦

18 指導変革の軌跡

18 福島県立安積高校
学びに向かう集団づくり◎卒業生を講師役とした「安積セミナー」で難関大への意識を高める

22 神奈川県・私立逗子開成中学・高校
学校改革◎「我が子を入れたい学校に」地に足を着けた改革で進学校へと転身

26 群馬県立吉井高校
総合学科の進路指導◎毎日の活動を蓄積する「夢ファイル」の軌跡から自律する力を付ける

30 30代教師の「転んでも起きる!」

常に目の前の生徒を見つめ、読解力を育成する授業づくりに努める
福岡県立宗像高校◎青柳孝明

32 生きたデータの徹底活用

教師、生徒の準備期間としての3年生0学期の指導

36 未来をつくる大学の研究室

「心の理論」を土台にし、認知発達の過程を解明する
京都大大学院教育学研究科 教育科学専攻 子安増生研究室

40 新課程への助走

新課程移行期の課題と実践—熊本県立第二高校の事例から—

44 大学選択 新たな視点

学生の主体性を引き出す学びの環境を用意する大学・学部

50 VIEW'S SQUARE

東日本大震災の被災者の皆さまに、心からお見舞い申し上げます。 VIEW21編集部一同

本文中のプロフィールは
すべて取材時のものです。
本文中、敬称略。
本誌記載の記事、写真の無断複写、
複製および転載を禁じます。

http://benesse.jp/berd/ 本誌記事は、Benesse教育研究開発センターのウェブサイトでもご覧いただけます

今、振り返る教師としての原点

私を育てた あの時代、あの出会い

生徒が考え、自ら成長する「理想のクラス」を追いかけて

徳島県立名西高校 河野 豊司 KAWANO TOYOJI

「クラス担任が一番やりがいがある」。ベテランと言われる年齢になってもそう語る教師は多い。だが、教師の醍醐味だからこそ、最も難しい役割だともいえる。若き日に先輩が築いた理想のクラスに出合った教師が、今日まで続く探求の日々を語る。

若き教師ゆえの壁

今から18年前、講師として徳島県立阿波高校の教壇に立ったその年に、私は教師人生を通じて追いかける理想のクラスに出合いました。

佐々木尊先生が担任を務める1学年のクラスでは、生徒が教師の言葉の意味を考え、自主的に動いていました。皆いつも笑顔で「こんなクラスで学べたら、どんなに楽しいだろう」と私がうらやむほどでした。一見生徒をぐいぐい引っ張る雰囲気でありながら、生徒が考える余地を残した言葉掛けを行う佐々木先生に、私は自分が目指すべき教師像を見つけました。

翌年、県内の普通科高校に新任として赴任し、続いて昼間定時制高校の教壇に立ちました。生徒の状況が異なる2校で担任を務めましたが、目指したのは佐々木先生のクラスでした。そして5年の時を経て、私は再び佐々木先生のいる阿波高校に戻ることになったのです。

ところが、1学年担任となった私は、担任、校務分掌、部活動の並立に忙殺されました。特に顧問を務めたソフトテニス部が全国レベルの強豪だったこともあり、私は次第に部活動に心血を注ぐようになったのです。クラスに掛ける時間が足りなくなり、夏を迎える頃には自分は担任としてどうすればよいのか分からなくなっていました。

私は佐々木先生に自分の苦しみを打ち明けました。私の話にうなずく先生を見て、「クラスはもっと副担任に任せればいいと言ってくれるのではないか」と期待し始めていました。

しかし、佐々木先生はこうおっしゃったのです。「若いうちは何でも挑戦しないと。担任が自分の可能性を信じられなければ、クラスの生徒の可能性を信じることも出来ない」と。

私はハッとしながらも、「自分も手助けするから、頑張ろう」と続ける佐々木先生の言葉から私への期待も感じました。また、話したことで気持ちが楽になったことも事実でした。

翌日から、私はいつの間にかおろそかにしていた担任としての役割を見直していきました。例えば、毎朝笑顔で教室に行く。目立つ子だけでなく、地道に努力する生徒にも声を掛ける……初心を思い出して、一つずつしっかりとやっていこうという気持ちを取り戻していました。

ゴールは存在しない

翌年、3学年の担任になった時も、佐々木先生の言葉に助けられました。受験を控えた3年生には、お互いを支え合う雰囲気が必要です。しかし、私のクラスの生徒の表情は固く、「高校生活を楽しんでいるのだろうか」と不安を感じる状況でした。悩んだ末、私は再び佐々木先生に相談しました。

先輩教師の言葉

若手への期待と自らの失敗を礎に助言した

徳島市立高校・教頭 SASAKI TAKASHI 佐々木 尊

阿波高校には教科指導、クラス運営など各分野で秀でた教師が多くいました。だから河野先生は、講師の頃から担任になったときのことを考えて、先輩教師の姿を追いかけていたのだと思います。

河野先生が理想だと言ってくれた私のクラスには、自分の考えを持った生徒がたくさんいました。その上、行事などではしっかりと結束するのです。生活記録などを通して日々の生徒理解にも努めましたが、生徒から学ぶことの方がたくさんあったようにも思います。

私から見れば、河野先生は阿波高校に戻ってからも活気のある素晴らしいクラスをつくっていました。特に応援合

左 ささき・たかし　化学科。阿波高校に12年勤務。その後、県教育研修センター、教育委員会学校政策課を経て、2009年より徳島市立高校教頭。

右 かわの・とよじ　公民科。初任は富岡東高校。城東高校北島分校（2002年3月閉校）を経て、阿波高校で11年勤務。2010年より名西高校。今年度は2年生担任を務める。

撮影◎阿波高校にて

佐々木先生は「クラスが楽しければ、生徒は学校を楽しめるし、学力も自ずと向上する」とおっしゃいました。担任の私に、入試で良い結果を出したいという焦りがあり、それが生徒に影響していたことを見抜いたのでしょう。生徒が、この高校で良かったと思えるクラスをつくることに注力しよう……先生の言葉で、担任として一番大切な仕事がはっきりとわかりました。

私が佐々木先生の言葉に励まされ、クラスに笑顔で戻ることが出来たのは、私が佐々木先生を心から信頼していたからです。今、自分が若い先生に言葉を掛けるとき、よく当時を思い出し、それだけの信頼関係を築けているだろうかといつも自問しています。クラスの生徒への声掛けも同僚への声掛けも、きっと同じなのだと思います。

18年間、私も多くのクラスを受け持ちました。阿波高校で3年間持ち上がったあるクラスは、40人中36人が現役で国公立大、難関私立大に進学し、浪人した4人も翌年には国公立大に進学するという結果を残すことが出来ました。リーダーを中心に生徒が自分で考え、行動するそのクラスはとても楽しい雰囲気で、社会人になった今でも連絡を取り合う関係です。

それでも私には、佐々木先生のあのクラスはもっと輝いていたように思えるのです。クラスの活気は合格実績のように数字で表せませんし、ここまで出来ればいいというゴールもありません。困難だけれど追いかけがいがある永遠の目標を、先生にいただいたのかもしれません。

戦での団結力などは学年で一番でした。担任と部活動顧問の両立は大変だったと思いますが、若い先生にはよくある悩みです。河野先生なら必ず乗り越えられると思い、自分の経験から言えることをそのまま伝えました。次の阿波高校を支える先生だと信じたからこそ、やってもらいたいと期待していたのも事実です。

「クラスが楽しくなければ学力は向上しない」という言葉の裏には、私の失敗経験があります。河野先生が戻ってくる前、私はある成績上位クラスを担任しました。気負いから学力偏重の学級経営をした結果、生徒の数人が「来年はこのクラスから出たい」と申し出てきたのです。生徒にとってクラスの居心地が悪ければ、学習どころではないのだと思い知らされました。

近年、人間関係づくりが苦手な生徒が見受けられます。しかし、生徒がクラスに安らぎや自分の存在意義、そして充実感を求めていることは変わっていません。一人ひとりの生徒をよく見て、全員が「楽しい」と感じられるクラスをつくる必要があります。担任の力量が、今まで以上に問われているのだと思います。

SPECIAL ISSUE

特集

学力を伸ばし志望を深める志望校検討会

3年生の志望校検討会は各校でどのように行われているのだろうか。生徒の学力を伸ばし、志望を深める検討会を行っている実践事例を紹介し、志望校検討会の意義について改めて考える。

担任の言葉で受験に向かう覚悟が出来た卒業生の声

「やって出来ないことはない。やらずに出来るはずがない」この言葉は、2年生の時に担任の先生が学級通信に書いた言葉で、苦しい時にずっと私を支えてくれました。弓道部の副部長として勉強と部活動の両立に悩んでいた頃、心の中で何度も繰り返しました。その言葉をこの手で書くことで、「将来をきちんと見据えて、志望大合格のためには今やるしかない」と覚悟を決めて受験態勢に入ることが出来ました。

進研ゼミ高校講座〈攻める宣誓プロジェクト〉に参加した生徒の体験談より

1 3年生の志望校検討会の課題

【課題整理 P.6】

ノウハウの蓄積に関する課題

入試の知識や教科に関する情報が少なく、合格させるための具体的な道筋が分からない

教師の意識やスキルに関する課題

クラスの生徒だけを見て、「学年全体」を見る意識が醸成されにくい

検討会の進め方に関する課題

志望校決定の校内基準があいまいなため、コンセンサスを得にくい

2 志望校検討会を充実させるポイント

長崎県立佐世保南高校 【学校事例① P.8】

◎進路指導部と3年生副担任による事前検討会 ノウハウの蓄積 教師の意識やスキル
◎学部系統を文理二つずつに分け、系統ごとに検討 ノウハウの蓄積 教師の意識やスキル
◎資料には模試の結果だけでなく、評定値や出欠も記載 検討会の進め方
◎担任が生徒の進路に対してしっかりと意見を持つ 教師の意識やスキル

静岡県立富士高校 【学校事例② P.12】

◎校内実力テストの作成と分析 ノウハウの蓄積 検討会の進め方
◎生徒と担任で出願パターンを作成 ノウハウの蓄積 検討会の進め方
◎他学年の参加や参加者全員による検討 ノウハウの蓄積 教師の意識やスキル
◎事前の3年生担任会、司会による準備を徹底 教師の意識やスキル 検討会の進め方

3 志望校検討会の意義

【インタビュー 栃木県立石橋高校校長 塩野谷英彦先生 P.16】

担任にとって 経験による差を縮め、自信と覚悟を持って生徒と面談する力が付く

教科担任にとって 現状の学力とこれからの伸びしろを正確に把握する力が付く

進路指導部にとって コーディネーター役として、生徒の力を最大限に引き出す力が付く

▼

生徒にとって 学力を伸ばし、志望を深めることが出来る

課題整理

志望校検討会の現状と課題

「VIEW21」の読者モニターアンケート結果から、主に3年生で実施される志望校検討会の現状と課題を確認する。

指導の基準づくりとノウハウの蓄積が課題

志望校検討会を「実施している」と回答した学校は8割。参加者は、担任は100％で、学年主任、進路主任、進路担当は8割以上となっている。学年の教科担当は48・8％と、管理職よりも少ない。

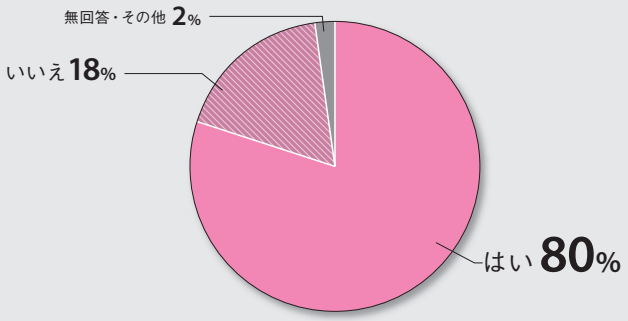
3年生で行う検討会は、平均2・7回。4～7月の実施目的は「志望校の確認・全体の学力把握」「夏休み前の面談で伝える内容の共有」などで、8～12月の実施目的は「併願校の検討」「冬休みの指導の目線合わせ」が多く挙げられた。1月以降の検討会はセンター試験後に開き、出願校を決定する学校が多い。

3年生で実施する検討会の課題は、「検討会の進め方」「教師の意識やスキル」「ノウハウの蓄積」に大別される。進め方に関する課題で目立ったのは、志望校を決定する際の校内基準があいまいな点だ。検討材料のデータが学年により異なる、数値を断片的に解釈してしまうなど、全体としての指導の合意が取りにくい現状があるようだ。

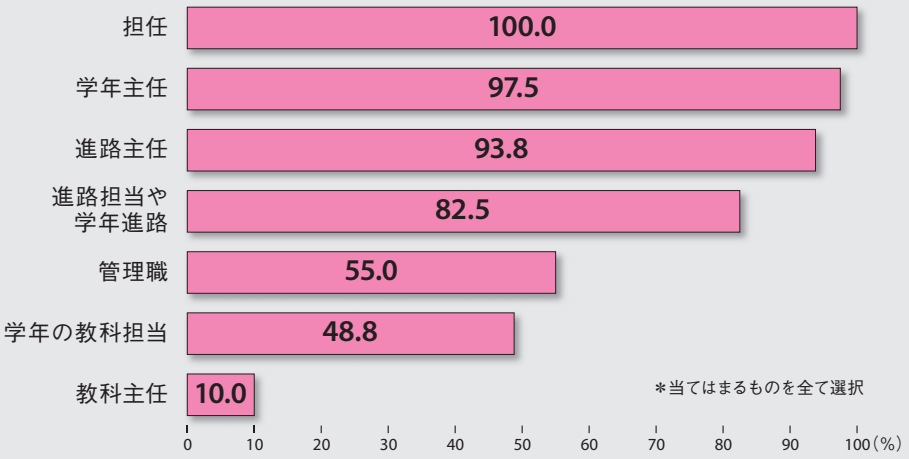
意識やスキルについては「学年や学校全体で指導する意識が低い」「生徒の意見をうのみにするだけで、指導になっていない」といった課題が目立った。また、ノウハウの蓄積については「入試の知識が積み重ならない」「教科担任のアドバイスが得られない」などの回答が見られた。

指導の足並みをそろえるための「基準づくり」、指導力を高めるための「指導ノウハウの蓄積」を進めながら、教師全員の意識を高めることが、検討会を意義あるものにするポイントとなりそうだ。

Q.1 校内で志望校検討会を実施していますか



Q.2 検討会に参加する先生はどのような先生ですか



＊当てはまるものを全て選択

Q.3 各時期の志望校検討会のテーマを教えてください

4~7月

■全体の傾向把握

- 学年全体の学力や志望の傾向を共有し、面談などに生かす。（愛知県）
- 生徒一人ひとりの進路希望と学年団の指導方針の共通理解を図り、進路指導に漏れがないようにする。（茨城県）

■入試形態や大まかな進路先の確認

- 推薦入試を軸にするか一般入試を軸にするかを検討する。（京都府）
- 一般入試だけでなく、担任から生徒個々の希望進路をヒアリング。AO入試・公募推薦・指定校推薦など、志望別に入試形態を確認する。（岩手県、静岡県、三重県、和歌山県、広島県、宮崎県）

■夏休み前後の指導の目線合わせ

- 生徒の志望に応じた志望校群を挙げる。担任の視野を広げておき、保護者懇談会で保護者の視野を広げることにつなげる。（富山県、広島県）
- それぞれの志望に実力を届かせるため、担任が生徒に夏休みの具体策をアドバイスできるようにノウハウを共有する。（東京都、三重県、滋賀県）
- 教科担当から夏休みの弱点補強として生徒に伝えるべきことを提示。志望校を「憧れ校」「実力相応校」「安心校」に分け、生徒の学力に合っているか判断する。（広島県）
- 各教科の特徴や今後の教科指導で留意すべき点を確認し、担任が把握していない生徒の力についてアドバイスする。（滋賀県）

8~12月

■出願パターンの検討

- 模試結果を基に国公立大の出願校を検討し、複数の教師の意見で裏付け、直後の三者面談で出願の話が出来るようにする。（福井県）
- センター試験前の志望校の幅を見る。センター試験後の検討がスムーズにいくように、いろいろな可能性を探っておく。（新潟県）
- 生徒の第1志望校受験の意向を確認。今後の伸びしろを考慮した志望校を検討する。（京都府）

■冬休み前後の指導の目線合わせ

- 妥当な国公立大を志望しているかを見極めつつ、私立大の併願校を検討。志望と実力に著しい開きがある場合は、センター試験後の面談の伏線をどのように張るかという点も検討する。（滋賀県）
- 生徒一人ひとりの学力推移と進路希望を確認し、指導法の共通理解を図る。これを冬休みの三者面談に活用する。（静岡県）
- 伸び悩む生徒や、志望校の変更が見られる生徒について今後の指導を考える。（秋田県）

■難関大志望者への指導

- 難関校を目指す生徒の状況を確認、共有し、その後の指導に生かす。（秋田県、愛知県）

1~2月

■出願校決定、個別学力試験の具体策

- センター試験の自己採点結果を受け、合格可能性の判定、より可能性のある大学の提示、直前期の学習などを検討し、三者面談に活用する。（静岡県など）
- センター試験の自己採点結果から、出願校を決定。生徒別に個別学力試験の得点を予想し、合格に向けどの分野をどのように力を付けるか、入試までの具体策を検討する。（広島県など）

Q.4 3年生で実施する志望校検討会の課題は何ですか

■検討会の運営に関する課題

- どうしても学年全体の検討になりがちで、個々の生徒について検討する時間が短い。（群馬県）
- 学年全体で一人ひとりを丁寧に検討すると時間がかかる。（静岡県）

■検討会で用いる資料やデータに関する課題

- 学校独自の出願基準がないため、業者のデータを中心に検討している。（秋田県、新潟県など）
- 学校全体としてデータが整理されていないため、検討するデータが学年によって異なる。（埼玉県、愛知県、宮崎県）

■検討内容に関する課題

- 外部からアドバイザーを招へいしているため、教師自身の入試の研究がおろそかになる傾向がある。（徳島県）
- 進路指導部内の学年間のつながりが弱く，前年度の経験を生かした検討にならない。（広島県）
- 学年としての統一方針があいまいで、担任の生徒分析力が弱いため、模試の分析だけに頼りがちになる。（埼玉県）

■検討メンバーの意識やスキルに関する課題

- 学校全体で指導するという意識が低く、クラスの生徒のみを見ようとする傾向がある。（秋田県、宮城県、埼玉県、愛知県、兵庫県など）
- 担任の意識の差が大きい。生徒を指導するか、生徒の意向を尊重するかでは大きく違うが、これに気付いていない担任もいる。「志望を育てる」意識が学校全体に浸透していない。（滋賀県、宮崎県）
- 入試の知識不足により、生徒の志望が的確かを客観的に判断できず、教科担当からも具体策が出てこない。（静岡県、広島県）
- 自分の担当教科の成績だけで判断してしまいがちである。（静岡県）
- 検討会に至るまでの担任の指導が、学年団によってばらつきがある。（愛知県、京都府、滋賀県）
- 進路指導部と担任の発言が多く、若手教師や教科担任からの発言が少ない。（新潟県、静岡県、京都府、福岡県）

■その他

- 生徒・保護者の思いと実力とのかい離の調整。（奈良県）
- 生徒の実際の成績と志望校のギャップをいかに埋めていくかの解決策が見いだせないことが多い。（北海道、岩手県、宮崎県）

Q.1～4出典／「VIEW21」高校版読者モニターへのアンケート結果より。アンケートは2011年6月に実施。ウェブ及び用紙を郵送し、ウェブ、もしくはファックスで回収。有効回答数は100。

学校事例 1

長崎県立佐世保南高校

生徒資料の充実と事前検討会の工夫で教師の意識改革を図る

クラス数が減少する中で合格者数を維持するため、志望校検討会を改善してきた長崎県立佐世保南高校。効率化を図りつつも、生徒資料の充実や事前検討会の工夫などにより、教師の意識を高める場として進化しつつある。

3年生の志望校検討会の実施時期と内容

回	時期	目的・内容	参加者
第1回	約1週間前に事前検討会		
	6月下旬	生徒の志望校や学力、課題を共有。志望校の合格可能性を検討し、生徒の学力や適性を見て、別の可能性がないかも探る。その結果を基に面談で生徒に揺さぶりをかける	進路指導部 3学年団 教科担任
第2回	約1週間前に事前検討会		
	9月下旬	9月までの模試の志望校を基に、7月の面談以降の生徒の志望状況を共有。教科のテコ入れ状況、夏休みの過ごし方も確認する。成績を含めて再度志望校の検討を行い、必要に応じて代替案を用意する	進路指導部 3学年団 教科担任
第3回	約1週間前に事前検討会		
	12月上旬	センター試験を見据え、志望校のシミュレーションを行う。担任及び進路指導部が作成したものと生徒の志望を比較検討し妥当性を探る	進路指導部 3学年団 教科担任
第4回	1月下旬	センター試験の結果を受け、出願校を検討。担任及び進路指導部は先行して生徒全員の出願先をシミュレーションしておく。検討会では生徒の個別学力試験の学力や意欲なども確認する	進路指導部 3学年団 教科担任

志望校検討会の改善ポイント

- 事前検討会を進路指導部と3年生副担任で実施し、客観的なデータに基づく判断を行った上で、本検討会を効率よく進める
- 事前検討会では学部系統を文理二つずつの4グループに分け、系統ごとに検討を行う
- 検討会で判断の基となる資料に、模試の偏差値だけでなく、評定値、出欠などの情報も載せ、伸びしろをしっかり測る
- 検討会で、担任としてどう判断するのかを厳しく問い、教師の指導力を高める

生徒減により国公立大の合格率の目標が38%→60%に

長崎県立佐世保南高校は、2年前から志望校検討会の改革に取り組んできた。この10年間で1学年の生徒数が3クラス分減ったが、進学校としての評価を維持するためには大学合格者数を維持する必要があった。進路指導主事の山田宗光先生は次のように話す。

「10年前は国公立大の合格率は約38%で、130人が合格していました。しかし、6クラスになった現在

PROFILE

長崎県立佐世保南高校

◎1908（明治41）年に長崎県立佐世保中学校として開校。「自彊自律」「和敬礼節」を校訓として、創造性豊かな知性と情操を養う。学力向上だけでなく、国際理解、英語教育、読書活動も推進し、幅広いコミュニケーション能力の育成を図っている。

設立　1908（明治41）年

形態　全日制／普通科／共学

生徒数（1学年）　約240人

11年度入試合格実績（現浪計）　国公立大は、大阪大、九州大、佐賀大、長崎大、熊本大、長崎県立大などに133人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大などに延べ178人が合格。

住所　〒857-1151 長崎県佐世保市日宇町 2526

電話　0956-31-5291

Web Site　http://www.sanan.ed.jp/minami/

は合格率を50%まで高めても合格者は120人で、合格者数150人となると合格率は60%が目標になります。保護者の現役進学志向も強く、これまで合格できなかった層を確実に現役合格させるためには、今まで以上に生徒と向き合い、志望校を考えさせる必要がありました」

そこで、山田先生が着目したのは3年生で行う志望校検討会だ。同校では「南高方式」として長年受け継がれてきた検討会だが、生徒数の多い時に始まったこともあり、検討過程がやや荒削りだった。そこで、会議を効率化し、生徒一人ひとりに掛ける時間を増やそうとした。

また、生徒に関する情報を今まで以上に詳細に把握する必要もあった。保護者はインターネットから多くの情報を得ていて、教師の声に耳を傾けてもらうためには、保護者が持つ以上の説得材料が教師になければならない。生徒一人ひとりをさまざまな角度から分析して学校の方針に説得力を持たせ、保護者から生徒の志望実現のために最大限の協力を得たいという期待もあった。

長崎県立佐世保南高校
山田宗光 Yamada Munemitsu
教職歴20年。同校赴任歴11年目。進路指導主事。「世の中には思い通りにならないこともあることを教えたい」

長崎県立佐世保南高校
鬼塚 聡 Onizuka Satoshi
教職歴19年。同校赴任歴2年目。進路指導副主任。「生徒が自らの可能性を広げるきっかけをつくりたい」

長崎県立佐世保南高校
石橋周一郎 Ishibashi Shuichiro
教職歴13年。同校赴任歴7年目。進路指導部。「深い進路・教材・授業研究をするように心掛けている」

長崎県立佐世保南高校
北川昭彦 Kitagawa Akihiko
教職歴10年。同校赴任歴7年目。進路指導部。「学校という集団で生活する大切さを教えたい」

生徒の実態を多角的に把握し伸びしろを見極める

改革の一つは、生徒資料の精緻化だ。以前の資料はそれまでの模試の結果を記載するだけだったが、各模試での志望校、3年間の評定値、出欠状況など、意識の変化や日常の様子が分かるデータを1枚にまとめた（図）。生徒の実態をさまざまな角度から把握し、多角的に可能性を追求しようとしたのだ。

「評定値は基礎学力を測るのに役立ちます。模試の偏差値は高くても評定値が低ければ、普段の学習をおろそかにしていることが多く、最終的に学力は伸び悩むことも考えられます。逆に、1・2年生で高い評定値であれば、しっかり学習に取り組んできた証拠であり、今は結果が出ていなくても、最後に大きく伸びる可能性があるのです」（山田先生）

出欠状況も同様だ。遅刻や欠席が少ない生徒は最後まで粘り強く頑張れる可能性が高い。しかし、安易な欠席が多い生徒は、最後に諦めてしまうことも考えられ、精神的な支援

図　第1回志望校検討会の資料（2010年度）

*学校資料をそのまま掲載

が重要になる。生活面の情報もきちんと追うことで、模試の結果だけでは見えない、生徒の基礎学力や心理状態を推し量ることが出来る。それによって、生徒の伸びしろを推測し、出願後をも見通して対策を立てていくことが出来るのだ。

系統別の事前検討会で会議を効率よく進める

事前検討会も見直した。年4回の検討会のうち、第3回までは全学年の進路指導部と3年生副担任による事前検討会を設けている。担任が参加しないのは、生徒の志望や担任の考えとは異なる観点から客観的に判断するためだ。

「担任が先入観を持つと、特定の志望に固執してしまうこともあり、広い視野を持って指導に当たれません。あくまで客観的なデータに基づき、生徒の可能性を広げる視点を持つことが大切なのです」（山田先生）

事前検討会の方法も変えた。以前はメンバー全員で全生徒を成績順に検討していたが、新しい方法では文系・理系で各二つ、計4グループに分かれ並行して行うことにした。

具体的な手順は次の通りだ。生徒のデータを一人ずつ検証し、志望校の合格可能性をA～Eで判定。加えてコメント（判定の根拠、志望校の適切性、他の志望校の可能性、補強すべき科目など）を準備し、検討会での生徒資料に記入する。以前は本検討会で担任に口頭で伝えていた内容をあらかじめ1枚にまとめることで、本検討会の効率化を図った。

「これまでは、事前検討会を本検討会の前週の金～日曜に実施していました。深夜や休日に顔を合わせて意見を述べ合うことは教師の一体感を醸成するには良い機会でしたが、負担が大きくなり過ぎていました。4グループに分けることで、検討時間が短縮され、平日の放課後（本検討会前週の水～金曜）に行えるようになりました。教師の負担が軽減すると共に、必要なメンバーが参加できるようになりました」（山田先生）

しかし、この方法は、研修面から考えると教師が特定の系統に関する知識しか積み上げられないデメリットもあると、山田先生は話す。

「若手教師に進路指導に求められる多様な知識をしっかり伝承する方法を模索する必要があります」

検討会の結果で生徒を揺さぶり成長を促す

6月下旬に行う第1回の本検討会では、生徒の志望校や学力の共有、合格に向けた課題の把握と夏休み中の対策などがテーマとなる。第2回は9月下旬で、夏休みの取り組みの結果と生徒の志望の変化を確認する。

12月上旬の第3回には出願先をシミュレーションする。生徒の成績と志望校を見て、「センター試験が○点なら第1志望に出願」というように出願先を絞り込む。そこに事前検討会で出した進路指導部の見解と生徒の志望を交え、妥当性を議論する。第4回はセンター試験後に、生徒一人ひとりのボーダーラインを確認し、個別学力試験の力を見極めて、出願校候補を決定する。

検討会の目的の一つは、生徒に揺さぶりをかけるため、本当にその志望で良いのか、覚悟を持って受験に臨もうとしているのかを担任が問い掛けられるようになることでもある。特に、第1回の検討会は生徒の可能性を広げる場だ。担任や進路が知恵を出し合い、あえて生徒の志望とは異なる大学を選び、検討会直後に行われる二者面談で、検討会での結果を生徒に投げ掛けることもある。第2回の検討会は、二者面談以降の生徒の様子を見て、志望校に対する意志は本物だったか、受験に向けた覚悟は出来ているかを確認する。揺さぶりの結果、視野を広げて志望を変える生徒、あくまで第1志望にこだわる生徒など、その反応はさまざまだが、教師は生徒の変化を見て、再度揺さぶりをかけるか、第1志望校に向かわせるかの方針を立て、次の面談に臨む。

進路指導副主任の鬼塚聡先生は、「本校に赴任して驚いたのは、生徒に志望校をしっかり考えさせていることです。あえて壁をつくり、それを越えさせることで、生徒を大人にしていく過程は、本校の特色の一つだと思います」と語る。

担任としてどうしたいか明確な意見を持つ

本検討会は、担任と生徒、進路という三者の意見がぶつかり合う場だ。生徒をどのようにしたいのかと

いう担任の思い、生徒自身の夢や志望、データを基に導き出した進路指導部の見解を交錯させることによって、生徒の志望を越えた幅広い可能性が見えてくるという。

それだけに担任がしっかり意見を持つことが何よりも重要になる。

「生徒の志望を優先することが教師のすべき判断だと考える人もいますが、生徒は未熟で、多くの選択肢の中から自分の進路を選んでいるとは限りません。生徒が本当にやりたいことは何か、適性はあるのかということを踏まえて、幅広い可能性を提示するのが教師の役目であり、生徒も多くの選択肢の中から選ぶからこそ、志望への思いやこだわりを強くするのです」（山田先生）

本検討会は担任にとって試練の場だ。「生徒の志望通り」という教師には「担任として、その生徒の将来をどう考えるのか」と厳しく問う。時には、進路指導室で個別に話し合うこともあるという。進路指導部の石橋周一郎先生は次のように話す。

「生徒をどうしたいのかという考えや事前調査が甘いと、検討会でどんどん突っ込まれました。生徒の意志を尊重することと、最適な道を探ることは、必ずしも同じではないことを検討会で学びました」

本検討会は担任にとってプレッシャーではあるが、結論が出れば、そのアドバイスは担任にとって心強い後ろ盾になる。進路指導部の北川昭彦先生は次のように述べる。

「我々は、生徒や保護者に決して不信感を抱かせてはなりません。検討会の意見は学校の総意です。それを自分なりに消化し面談に臨むことで、初めての3年生担任であっても自信を持って生徒や保護者にアドバイスできるのです」

「検討会の目的は、指導の最前線に立つ担任を支援することです。検討会で得た結論に対して保護者が納得しない場合は、進路指導部が話すこともあります。生徒と向き合っているのは自分一人ではなく、学校全体で生徒を見守っているということを、先生方は検討会を通じて感じていると思います」（山田先生）

生徒の信頼を得る決め手は教科指導力

教科担任にとっても、検討会は試練の場だ。

合格可能性を探る時、生徒に個別学力試験の力があるかどうかは重要な情報だが、それを答えられるのは日頃授業で生徒と接している教科担任だけだ。本検討会で「個別学力試験の物理は大丈夫か」「小論文は書けるか」と聞かれれば、「大丈夫です」「この大学の問題にはこういう傾向があるのでこの生徒には向かない」などと的確に答えることが必要になる。普段どれだけ生徒とかかわり、学力を把握しているかが問われ、入試問題研究を丁寧に行っているかも明らかになるのである。

「生徒から信頼を得る決め手は、教科指導力です。授業で分かりやすく教え、成績を伸ばすことも大切ですが、数字に表れない学力を正しく分析できる力も、教科担任に求められているのです」（山田先生）

こうした教科担任の意見に対し、担任はそれが他クラスの生徒の分析であってもメモを取り、知識を吸収する姿勢が求められる。

「他クラスの生徒でも、『今の意見は自分のクラスの生徒に対しても当てはまる』『あの生徒もこの大学の推薦入試を受験できそうだ』などと考えながらメモを取るよう心掛けています。他の担任の説明を聞き、『この先生はここまで調べているんだ』『資料をここまで読み込んでいるのか』と、刺激を受けることも少なくありません」（北川先生）

「担任としても、教科担任としても、ある程度のプレッシャーは必要です。自分が生徒のために考えたことが、ベテランの先生方に認めてもらえれば自信になりますし、指摘は良い勉強になります。進路指導部に負けない心構えで検討会に臨むくらいの方が、意見が活発に飛び交い、充実した検討会になるのではないでしょうか」（石橋先生）

同校の志望校検討会は、ベテラン・若手を問わず、教師同士が刺激を与え合う場にもなっている。

学校事例 2

静岡県立富士高校

校内実力テストの分析で生徒の伸びしろを見極め指導の平準化を目指す

静岡県立富士高校は年6回の志望校検討会に、全校体制で取り組む。生徒と担任とで練る併願パターン、担任会での事前準備、生徒の伸びしろを見極めるための教科指導力の向上などにより志望校検討の精緻化を図る。

3年生の志望校検討会の実施時期と内容

回	時　期	目的・内容	参加者
	4月	入試総括会。前年度第6回の検討会の結果を基に、教師全員で前年度の入試結果を総括	全教師
第1回	5月下旬	新旧担任連絡会。新旧担任の質疑応答、各学年の指導方針の共有	全教師
第2回	7月上旬	校内実力テストと模試の結果を分析・共有。当該学年の裁量による自由な検討会（夏休みの課題設定、面談に向けての目線合わせなど）	全教師
第3回	10月下旬	校内実力テストと模試の結果を分析・共有。当該学年の裁量による自由な検討会（気になる生徒をピックアップしての志望校検討など）	全教師
第4回	12月上旬	校内実力テストと模試の結果を分析・共有。生徒が担任と共に作成した四つの出願パターンを基に、各クラス文系・理系各5人の志望校を検討	全教師
第5回	1月下旬	センター試験後、生徒が作成した四つの出願パターンを基に、2日間掛けて生徒全員の出願校を検討	全教師
第6回	3月下旬	入試総括会。入試結果を踏まえ、1年間の進路指導の反省と課題の分析を行い、次年度に向けた方針を共有	進路指導部

志望校検討会のポイント

- 教科指導力向上のために、検討会で校内実力テストの分析を必ず行う
- センター試験の得点に応じた出願先を4パターン、生徒と担任が話し合って練り上げる
- 1学年約40人分（第5回は約320人分）の出願パターンを参加者全員で検討。客観的な判断を下すと共に、各教師がさまざまな生徒への指導ノウハウを蓄積する
- 司会の事前準備、週1回の担任会を十分に行い、検討会を活性化させる

PROFILE

静岡県立富士高校

◎1923（大正12）年に静岡県立旧制中学校として開校。校訓は「克己心身を練れ」「勤勉実力を養え」「至誠事に当れ」。部活動も活発で、野球部は過去2回甲子園出場、百人一首部は全国大会10連覇を成し遂げた全国屈指の強豪として知られる。

設立　1923（大正12）年

形態　全日制・定時制／普通科・理数科／共学

生徒数（1学年）　約320人

11年度入試合格実績（現浪計）　国公立大は、東北大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大、九州大など243人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大などに延べ545人が合格。

住所　〒416-0903　静岡県富士市松本17

電話　0545-61-0100

Web Site　http://www.shizuoka-c.ed.jp/fuji-h/

3年生の検討会に1・2年生の担任も参加

静岡県立富士高校の3年生の志望校検討会が現在の形で定着したのは15年ほど前。以降、3年間の進路指導の核として全校体制で取り組んできた。一人ひとりの入試結果は、生徒個人や担任、学年ではなく、学校全体の責任と捉えているからだ。

静岡県立富士高校
佐藤房生 Sato Fusao
教職歴26年。同校赴任歴12年目。進路指導主事。「考えることの面白さ、楽しさ、大切さを伝えていきたい」

静岡県立富士高校
望月伸浩 Mochizuki Nobuhiro
教職歴26年。同校赴任歴7年目。1年生主任。「素晴らしい生徒と共に日々過ごせることに感謝している」

静岡県立富士高校
和田里衣子 Wada Rieko
同校赴任歴6年目。2年生担任。「人生に高校時代をグラウンディングできる生徒を育てたい」

静岡県立富士高校
秋永能宏 Akinaga Yoshihiro
教職歴18年。同校赴任歴11年目。3年生担任。「生徒の卒業時に後悔しないことを常に意識し、行動したい」

「年6回ある検討会のほとんどに1・2年生の担任も参加しています。学校全体で生徒の状況を共有しようという意識が定着しているのが本校の強みです」と、進路課で2年生担任の和田里衣子先生は話す。

「学年を超えて教師全員で3年生の進路指導にかかわることにより、本校の進路指導の方針やノウハウを共有し、学年間での指導の違いをなくし、教師の指導力を平準化することを目指しています。それが、本校の志望校検討会の最大の意義です」

生徒や保護者の持つ情報量の変化も、志望校検討会の重要性を高めている。今はインターネットなどにより、入試に関する情報を簡単に入手できるようになった。ところが、保護者は自分たちに都合の良い情報だけを信じ、教師の言葉に耳を傾けようとしないこともある。進路指導主事の佐藤房生先生は、そうした保護者に説得力を持った話をするためにも志望校検討会が必要だと話す。

「生徒に伝える方針は、教師全員で検討することによって、担任一個人の見解ではなく学校全体の総意となります。経験の浅い教師でも自信を持って指導できるようになります」

生徒と担任が練った出願先を客観的に判断する

志望校検討会は年6回行うが、最も鍵となるのは、センター試験の得点に応じた出願パターンを、参加した教師全員で議論する12月上旬の第4回検討会だ。手順を見ていこう。

まず、第4回検討会の前までに教師と生徒が話し合い、センター試験の得点に応じて国公立大の出願先を4パターン作成する（P.14図）。第1志望校をケースAとし、ケースBはケースAより20～30点低い場合、ケースCはケースBより20～30点低い場合、ケースDはケースCより20～30点低い場合だ。私立大志望の生徒も、同じように4パターン作成する。3年生担任の秋永能宏先生はその意義を次のように述べる。

「センター試験で思うように得点できず、慌てて志望校を選び直したり、悲観して志望を大幅に下げたりする生徒は少なくありません。たとえセンター試験に失敗しても、気持ちを切り替えて最後まで入試に向かえるよう、あらゆる事態を想定しておくことが大切です」

10月までに、まず生徒自身がシミュレーションして4パターンの出願校を所定の用紙に書き込み、それを見ながら担任と面談を重ねて11月までに完成させる。この過程は生徒が志望を明確にしたり視野を広げたりすることにも効果があると、1年生主任の望月伸浩先生は指摘する。

「大学について調べたり、担任と面談を重ねたりするうちに、自分にはこの分野しかないと決意を新たにすることもあれば、理学部の化学科志望の生徒が工学部に視野を広げるようになることもあります。志望校を徹底的に考えさせることで、より自分の志望が明確になり、将来を具体的に描けるようになるのです」

そして、第4回の検討会では、各クラス5人の生徒の出願パターンを参加者全員で話し合う。

「学力に比べて志望が高い」「セン

ター試験の結果を見てから判断すればよいのでは」「個別学力試験の力に不安があるのでセンター試験では高得点が必要となる」など、志望校の妥当性を指摘され、出願パターンを全面的に見直すこともあるという。「センター試験後に志望校を選び直していては間に合いません。12月の時点で見直す方がはるかに合格に近づくのです」と和田先生は話す。

1学年8クラスのため、計40人の出願パターンを検討するわけだが、東京大に挑戦させたい生徒、国公立大合格がぎりぎりの生徒、部活動に熱心で今後の伸びしろが期待できる生徒、真面目だが学力が伸び悩んでいる生徒、保護者の説得が難しい生徒など、状況はさまざまだ。学力層や状況が異なる生徒の志望校を全教師一丸となって検討することによって、一人の生徒を複数の視点から判断し、また担任はクラス以外の生徒への進路指導のノウハウが得られるようにもなるのである。

情報を持ち寄り「見えない学力」を明らかにする

もう一つ重要なポイントは、第2～4回で行う校内実力テストの分析だ。生徒の学力を正しく把握して教科指導に生かすと共に、出願パターンをより精緻化するための情報源となる。特に第4回では、生徒個々の教科ごとの得点、解けなかった問題の難易度まで確認し、「地方の国公立大は大丈夫だが、旧帝大クラスでは数学が課題となる」といった議論を進める。

「客観データは必要ですが、日々指導している教師にしか分からない『見えない学力』こそが進路指導の鍵となります。『最近、答案が書けるようになった。2月までにはかなり伸びるのではないか』というように、生徒の日頃の様子を踏まえて伸びしろを推測できるのが、教師の強みです。客観データだけでは見えない、生徒の隠れた実力を明らかにし、可能性を広げることも志望校検討会の重要な役割です」（望月先生）

こうした過程は、教師の進路指導力だけでなく、教科指導力の向上にもつながる。校内実力テストは5教科で実施し、平均点が40点となるように教科担当が作問する。詳細に総括して生徒の実力を確かめ、教師の作問力や授業力を高める。

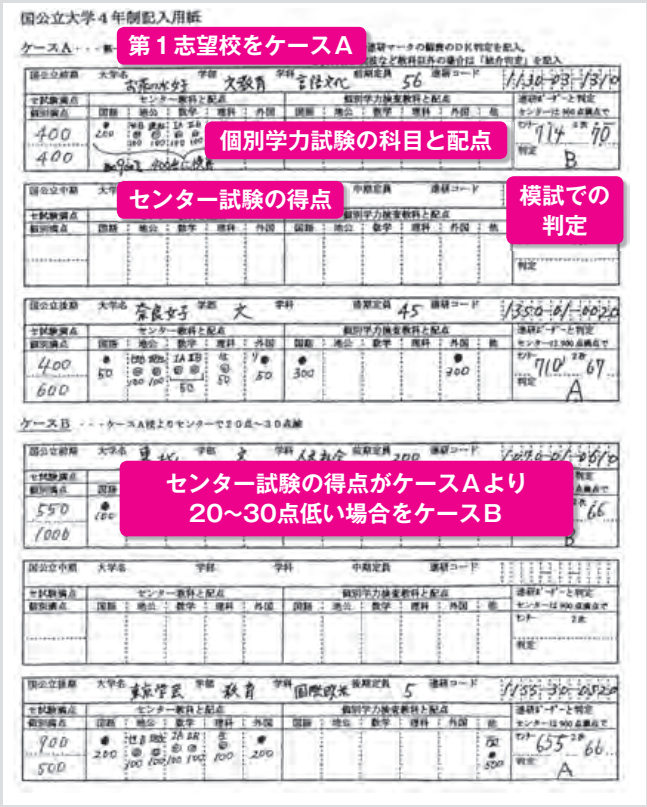
「校内実力テストの分析では、平均点や正答率だけでなく、学年全体や文理ごとの傾向、各学力層で取り組ませる問題集と必要な学習時間も示してもらいます。教科担当にとっては教科指導に生かせ、分析を聞く担任は二者面談で他教科に関する質問にも答えられるようになります。特に、若手教師にとっては、進路指導力、教科指導力を共に鍛える絶好の機会となっています」（望月先生）

また、校内実力テストの作問力の裏付けとして行われているのが、夏休みに作成する「入試問題分析」だ。分析を重ねることで、「富士高生にとっての各大学の難易」が分かるようになるという。

客観的な判断をするため他学年の教師が司会を担う

このように、同校の志望校検討会

図　第4回志望校検討会の資料



検討会では第1志望校が北から順になるよう生徒を並べる ＊学校資料をそのまま掲載

は明確な目的の下に行われているが、検討会の進行に重要な役割を果たしているのは司会役となる教師である。司会は単なる議事の進行役ではなく、検討内容によって、この場合はどの教師にアドバイスをもらうのが適切か、このケースではどのようなデータが必要かということを瞬時に判断し、議事を滞りなく進める力が必要だ。そのため、司会は同校で3年生担任の経験のあるベテラン教師が担当することが多いという。

「司会を任された時には、全ての生徒のデータを確認し、志望校の妥当性を自分なりに見極めておくようにしています。気になる生徒については、事前に担任の意向を聞いたり、教科の先生に相談したりしておきます。限られた時間内で話し合いを進めるためには、事前準備が何よりも大切です」（秋永先生）

第4、5回の検討会では、1・2年生の教師が司会を担う。文理の2グループに分かれて検討会を開くため、3学年団も二分となる。3年生の教師が検討に集中できるようにするためであり、また、他学年の教師の方が客観性・公正性を保てるからだ。

「担任は時間をかけて生徒と話し合いを重ねてきているので、数値的に見ると合格が厳しくても『生徒がそこまで言うのなら』と考えてしまい、適切な判断が下せなくなることがあります。情に流されず冷静な判断が出来るよう、他学年の視点が必要なのです」（和田先生）

検討会に際しては担任団での目線合わせも重要となるが、3年生の担任と学年主任に進路指導主事を加えて開く、週1回の担任会がその役割を果たす。例えば、第1回の検討会（新旧担任連絡会）は、新3学年団が旧学年団に質問を投げ掛ける形式で行われるが、質問の作成や返答は担任会で練られる。具体的には、①4月までに新担任団が旧担任団に質問を投げ掛ける、②旧担任団は検討会までに文書で回答、③新担任団は担任会で回答を精査し、更に踏み込んだ質問を検討会でぶつけるという。

「前年度の入試で得たノウハウや経験の共有も大切ですが、それ以上に重視するのは、学年運営に対する意識付けです。担任会で質問を考えたり、回答を共有したりすることで気持ちを引き締め、1年間の進路指導を考えるきっかけにしてほしいと考えています」（佐藤先生）

第4回検討会で出願パターンの検討対象となる各クラス5人の生徒も担任会で事前に選ぶ。まず担任が候補となる生徒を選び、同じような課題を持つ生徒が重ならないよう担任会で調整する。

1・2年生の検討会と3年生での指導を結び付ける

入試結果が出そろった3月には、第6回として1年間の進路指導を総括する。出願前に予想した合格者数と実際の数を比較し、出願は妥当だったか、なぜこの生徒は合格し、別の生徒は不合格となったのか、忌憚のない意見を述べ合う。以前は、担任の進路指導力が課題に挙げられることが多かったが、今は教科指導についての反省が中心だという。

「検討会がしっかり機能し、担任間の指導力の差がなくなってきたからだと思います」（佐藤先生）

今後の課題は、1・2年生の志望校検討会と3年生の志望校検討会をどのように連携させるかだ。1・2年生でも学年団で検討会を開き、生徒一人ひとりの週単位の学習時間や模試結果などのデータを学年団で共有している。どの教科が強いのか、伸びしろはあるのかといった生徒の情報を3年生での指導に生かすと共に、生徒にもっと早く志望校を考えさせるなど、生徒も巻き込んだ形で生かしていく方法を考えていくという。

「生徒が中途半端な情報に流されず、自分の夢を保護者に語れるくらいに確固とした志望を持ち、自分で人生を進めていく覚悟を、なるべく早い時期に持たせることが出来れば、3年生の進路指導は効果的に進められるのではないかと期待しています。本校が更に伸びていくための鍵が、そこにあるのではないかと考えています」（和田先生）

インタビュー

志望校検討会は「学校力」が試される場

栃木県立石橋高校校長　塩野谷英彦

志望校検討会は単に生徒の志望のマッチングを図るものではない。生徒の志望を育てて可能性を広げる場であり、教師にとっての学びの機会でもある。栃木県立石橋高校の塩野谷英彦校長に、進学校での豊富な指導経験を基に、志望校検討会の意義、検討会を有効に機能させるためのポイントを聞いた。

生徒をどれだけ多面的に捉えられているか

志望校検討会は「学校力が問われる場」だと、私は考えています。検討会で何よりも大切なのは、生徒が将来に何を望んでいるかを把握し、その実現にはどのような進路指導が適切なのかを見極めること、そして志望実現に必要な力が生徒に備わっているかどうかを、伸びしろも含めて判断することです。単に教科の成績に応じて志望校を振り分けるだけの場であってはなりません。

そこで問われるのは、教師が生徒一人ひとりをどれだけ把握しているかです。担任は授業や面談、普段の生活を通してどう生徒と接し、学力や志望、気質を把握しているか。進路指導部は模試や実力テストなどのデータを基に、的確に生徒の合格可能性を判断できるか。教科担任や部活動顧問は、担任が気付いていない生徒の一面をどれだけ把握しているか。検討会で得た結論は、生徒の可能性を広げ、意欲を引き出すものとなっているか。保護者を安心させられるだけの説得力はあるか。

生徒を多面的に捉え、潜在的な力を引き出し、進路実現に結び付けるという学校の総合力が、検討会で問われるのです。

生徒に高い目標を持たせ進路の幅を広げる

検討会は、生徒と教師双方に意義のあるものでなければなりません。

生徒の学力を伸ばし、人間的な成長を促す場であってほしいと思います。A判定やB判定という合否ラインのみで判断するならば、検討会を行う意味はありません。センター試験の結果を受けて現実的に見極めるべき局面はありますが、それ以前の検討会は、生徒に自分の力を見切らせるのではなく、高い目標を持たせ、頑張らせるような志望を提示することが大切です。試練や壁を設けることで、生徒は学力だけでなく、人間的にも大きく成長していくのです。

控えめな生徒の場合、志望が高ければ高いほど自分では口に出しづらいものです。また、自分の適性を把握できておらず、大学の知識が少ないためにミスマッチを起こすこともあります。そうした場合には、進路指導部や学年団が後ろ盾となり、担任が「もっと高い目標に挑戦してみたらどうだ」などと背中を押すことも必要でしょう。生徒自身が気付いていない志望や適性をつかみ、それに応じて生徒が知らない大学や学部を紹介し、進路の幅を広げることも

大切です。学年団や進路指導部が知恵を出し合い、生徒の進路の可能性を広げていくことも検討会の重要な役割なのです。

担任の指導力と自信を高める研修の場

学級担任や教科担任にとって、検討会は絶好の研修の場です。

検討会では、さまざまな大学・学部の入試情報が飛び交います。どのような入試方式があるのか、学部・学科によって必要な科目は何か。入試にかかわる基礎的な知識を習得する場として有効です。また、模試や実力テストの成績などをどのように見るのかについても、学ぶべき点は多いはずです。判定はDだが個別学力試験の力はある、A大の入試傾向はこうなので、この生徒に向いているなど、模試の合否判定だけでは分からない、データの背後にある情報を読み取る力が身に付きます。

教師間の指導力の差を縮めることも検討会の狙いの一つです。保護者は多くの情報を持っています。一度、学校への信頼がなくなれば、塾や予備校などの情報にばかり耳を傾けるようになるでしょう。クラス担任が若手教師だというだけで不安を抱く保護者も少なくありません。

検討会で出た結論は、担任個人の見解ではなく、学校の総意です。担任は自信を持って生徒や保護者との面談に臨めるようになり、ひいては学校に対する生徒・保護者の信頼にもつながるのです。

検討会は、教科担任にとっても授業力を向上させる良い機会になります。検討会では、生徒の個別学力試験の対応力が教科担任に問われる場面が多々あります。それに答えるためには、主要大学の入試問題を解き、出題傾向を把握する必要があります。入試問題研究によって作問力を高め、定期試験や校内模試の作問や採点を通して、生徒の学力を把握し、指導改善につなげる。このような日々の研鑽が必要であることを、検討会を通じて自覚していくのです。

しおのや・ひでひこ◎教職歴32年、同校に赴任して2年目。栃木県立宇都宮高校、栃木県立黒磯高校校長などを経て、現職。

教師は生徒の人生のコーディネーター

検討会を有効に機能させるために意識したいのは、検討会を行事化・儀式化させないことです。毎年行っているからという理由で実施しても、生徒の可能性を広げる場にはなりません。

儀式化させないためには、担任による生徒把握が何よりも重要です。志望校を考える上で問題になるのは成績だけではありません。生徒の性格や悩み、友人関係、通塾状況、家族構成にまで及びます。これらを把握するために重要なのは面談です。机を挟んで話し合うだけでなく、掃除の時間や廊下ですれ違った時の会話からも生徒の様子は分かります。部活動に熱心な生徒なら、練習の様子を見ることも必要です。

今は個人情報保護の観点から、家族関係などにまで質問を深めない学校も多いようですが、きょうだいがいるのか、保護者はどのような仕事をしているのかといった情報は、生徒の進路観を把握する上で重要な要素です。面談や普段の会話などを通して、可能な範囲で生徒の生活まで把握し、その生徒を知ろうとすることが大切です。

教師は、生徒の人生に積極的にかかわっていくべきだと思います。そもそも、教壇に立って授業をすること自体、私たちは生徒の人生にかかわっているのだということを自覚する必要があります。

「教師は生徒の人生のコーディネーターである」。そうした意識で生徒に迫っていくことが検討会を活性化させ、ひいては生徒の志望を実現するための「学校力」の向上をもたらすのではないでしょうか。

福島県立
安積高校

学びに向かう集団づくり

卒業生を講師役とした「安積セミナー」で難関大への意識を高める

◎2001年度、男子校から共学となる。02年から5年間、スーパーサイエンスハイスクールの指定を受ける。開拓者精神、文武両道、質実剛健を教育の精神とする。自由な校風を重んじ、制服は設けていない。敷地内の旧本館は国の重要文化財。

設立
1884（明治17）年

形態
全日制／普通科／共学

生徒数
1学年約320人

11年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、東北大35人、福島大22人、東京大6人、京都大2人などに計230人が合格。私立大は、慶應義塾大、中央大、東京理科大、明治大、早稲田大などに延べ415人が合格。

住所
〒963-8851
福島県郡山市開成5-25-63

電話
024-922-4310

Web Site
http://www.asaka-h.fks.ed.jp/

変革のステップ

背景
◎第1志望校合格への意欲が維持できず、易きに流れる傾向があった
STEP 1

実践
◎卒業生の力を活用した「安積セミナー」を年2回開催。難関大を目指す集団づくりを行う
STEP 2

成果
◎卒業生の言葉で意欲が高まると共に、低学年時からすべきことが分かり、目標を持って学ぶ姿勢が育つ
STEP 3

易きに流れる生徒を学びに向かう集団にしたい

創立127年の伝統を誇る福島県立安積高校は、県内屈指の進学校で、旧帝大をはじめとする難関大に多くの生徒が合格する。自由な校風が伝統であり、制服はなく、生徒の愛校心が強いのが特徴だ。

長らく地域から厚い信頼を寄せられてきた同校だが、近年、教師は生徒の志望大合格への意欲をいかに高め、維持するかに頭を悩ませていた。成績上位層・下位層を問わず、「易きに流れる」傾向が目立ってきていたからだ。例えば、毎年、入学時には30人ほどが東京大を志望校に挙げるが、学年が上がるにつれてその数は減り、実際に受験するのは10人程度だった。3年間を通して意欲を高めていけば、もっと多くの生徒が初めに掲げていた目標に挑戦できるのではないかという思いがあった。

こうした雰囲気を改善しようと、進路指導を大きく変えたのが、123期生（2010年卒業）の学年団だった。当時担任で、現在進路主任の森下陽一郎先生は次のように振り返る。

「当時の本校は、学年全体で切磋琢磨し、難関大に果敢に挑戦するという雰囲気が弱かったと思います。学年全体の意気を揚げるためにも、成績上位層から下位層までが一体となって上を目指そうとする集団をつくろうと

学年主任をはじめ、学年団で考えました」

最も力を入れたのは、生徒への意識付けだ。学年集会で「君たちは一人ではない。みんなで受験に向かおう」と繰り返し伝え、横のつながりを意識させることを心掛けた。並行して「もっと学校を頼ろう」「学校で勉強しよう」などと声を掛け、学校への帰属意識を高めた。加藤知道教頭は次のように話す。

「本校には素直な生徒が多くいます。放課後、学校に残って勉強する生徒が徐々に増え始め、クラスメートのそうした姿を見て、次第に輪が広がっていきました。共に机を並べて学ぶ中で、仲間意識や良い意味でのライバル意識も生まれました」

福島県立安積高校教頭
加藤知道 Kato Tomomichi
教職歴27年。同校に赴任して3年目。「誠実に物事に当たる。生徒だけではなく、教頭として先生も『その気』にさせたい」

福島県立安積高校
菅野多美子 Kanno Tamiko
教職歴32年。同校に赴任して6年目。教務主任。「考えて、考えて、考え抜いて、分かった時の楽しさを伝えたい」

福島県立安積高校
野内 明 Nouchi Akira
教職歴23年。同校に赴任して6年目。教務副主任。「イメージする力の基盤となり、技術となる『国語』の指導を追究する」

福島県立安積高校
森下陽一郎 Morishita Yoichiro
教職歴15年。同校に赴任して5年目。進路主任。「生徒は次世代を担う大切な存在。彼らの可能性を引き出したい」

1、2年生で追試を徹底的に行い3年生への弾みをつける

それまでも、土曜講座や月例テスト、追試などを実施し、基礎力及び発展力の育成に努めていた。しかし、どの科目をいつまで教師主導で引っ張っていくか、国語、数学、英語の3教科をどこで仕上げ、遅れがちな理科と社会とのバランスをどう取るかが課題だった。122期担任で、現在は教務主任の菅野多美子先生は次のように話す。

「123期は、1、2年生の時に徹底して追試を行い、2年生後半には学年全体で東京大の過去問を解くなどの取り組みをしました。文系でも数学を諦める生徒が減り、難関大を目指す意識が高まったのだと感じています」

1、2年生での数学の基礎の徹底は、上位層にも変化をもたらした。現役東京大合格者数が、122期生は6人全てが理系だったが、123期生は7人のうち5人が文系の生徒だった。

追試の徹底は、しっかり基礎を固め、3年生への助走とする意味も大きかった。

「3年生になると追試はぴたりとやめました。ここからは、生徒自身の力で受験に立ち向かう必要があることを示すためです。2年生までに十分に基礎を固めたからこそ、3年生で手を離す指導が出来ました」（森下先生）

一連の指導改革により、123期生の進学実績は全体的に向上した。更に、生徒同士で切磋琢磨する学習集団が形成されたことに、教師は自信を深めた。

卒業生を講師とした宿泊セミナーを実施

123期生での成功を機に、生徒の力を伸ばし切れる学校となるべく、10年度には学びに向かう生徒集団づくりの新たな取り組みとして、2泊3日の「安積セミナー」（P.20図）を行った。これは、1、2年生の東京大志望者を対象に、卒業生の東京大生を講師に迎えて行う勉強会だ。10年度は8月と12月、講師役の大学生の帰省時期に合わせて実施し、いずれも40人ほどが参加した。年2回の開催としたのは、取り組みを点で終わらせず線でつなげ、学習への意欲を持続させようと考えたためだ。

夏のセミナーでは、卒業生が学習方法などを詳細に説明した後、生徒が持参した問題集などから質問をする形式で学習を進め、自学自習の意識を高めた。冬のセミナーは、卒業生による東京大の入試問題を使った講義が中心だ。更に、

東京大を訪問し、教授の講義を受けた。

東京大志望者への意識付けを重視した理由を、森下先生は次のように説明する。

「本校は、福島、そして日本を引っ張るリーダーを育成する使命を担っています。地域の期待に応えられなければ、安積高校の存在意義はなくなってしまう。東京大は、国立大の中でも予算や人員の配分が大きく研究体制が整っており、大きな夢や目標を持つ生徒の可能性を引き出してくれる大学だと考えています。学生の意識も高く、学びの環境としても申し分ありません。リーダーを育てるためにも東京大への進学を支援したいのです」

「横」からのアドバイスにより目標を高める

セミナーは、生徒にどのような影響を与えているのか。何よりも身近な存在である卒業生から教わることで、学習効果が大きく上がると、教務副主任の野内明先生は話す。

「指導法の面では、当然、卒業生は教師に比べて未熟です。しかし、卒業生は自身の経験を踏まえて、生徒と同じ目線で教えることが出来ます。教師では、生徒に寄り添おうと努めても、どうしても『斜め上』からの目線になってしまうため、こうした『横』からのアドバイスは、生徒にとって実感のこもった言葉として強く印象に残ります」

目標に対する自覚を持ちやすくなるという効果もあると、加藤教頭は話す。

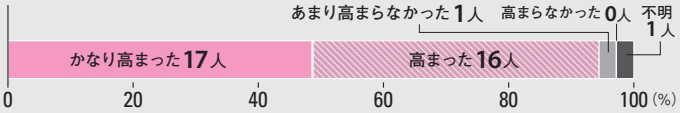
「部活動の先輩が、実は勉強も頑張っている。そして、高い目標を実現した姿を見て、『自

図 「安積セミナー」

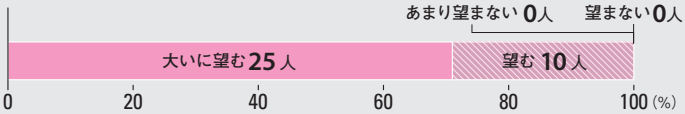
2011年8月に開かれた「安積セミナー」には、1、2年生計43人が出席。夏のセミナーは自学自習の力を付けることに重きを置く。写真は、卒業生が在校生がつまずいている問題に個別に答え、解法を教える様子

2011年度夏のセミナー参加者へのアンケート結果

Q. 安積セミナーに参加して、難関大進学へ向けての意識は高まりましたか



Q. 安積セミナーの開催を今後も望みますか



＊回答数35人

自由記述回答には、「難関大入試でも基本が大切だと分かった」「あくまで自分で考えることが大切なことを理解した」「効果的な勉強法や学校生活に対する心構えなどが参考になった」といった声が寄せられた。また、「医学部、京都大、東北大の先輩の話も聞きたかった」「シンポジウムや討論会のような形で話を聞いても良かったのではないか」「回数をもっと増やして、夏も合宿のような形にしてほしい」といった要望もあった。

2010年度冬の「安積セミナー」のスケジュール

◉1日目（安積高校にて）
- 開講式（卒業生から一言）
- 自己紹介・目覚めの勉強
- 東京大対策授業（国語、英語）
- 受験指導「東京大理Ⅲの先輩から受験戦略を学ぶ」
- 夕食・入浴・自由時間（先輩とじっくりと話をする時間）
- 自習

◉2日目（安積高校から東京大へ）
- バスで東京大を訪問
- 東京大教授らの授業を受ける「工学 最前線」「哲学への道」「政治学への道」

◉3日目（安積高校にて）
- 東京大対策授業（数学）／標準レベル数学特訓（分野別）（どちらかを選択）
- 本校初の女子東京大合格者の講演
- 講演「女性の理系進学について」／自習（どちらかを選択）
- 成果のまとめ
- 閉講式（卒業生からのメッセージ）

＊アンケート結果・スケジュール共に学校資料を基に編集部にて作成

分にも出来るのではないか』という意識が生まれていくようです。自分と同じ生活を送ってきた本校の卒業生の言葉だからこそ、教師の言葉とは異なる説得力があるのです」

「安積セミナー」成功の鍵は、卒業生の協力にある。10年度実施の際には、123期の東京大合格者のうち5人が、快く講師役を引き受けてくれた。その背景には、学校を盛り立てたいという卒業生の思いがある。

「東日本大震災の際にも、122期生から『こんな時だからこそ、夢を持ち、希望を実現してほしいというエールを125期生（現3年生）に送りたい』という問い合わせの電話がありました。本校で学んだことを思い、母校のために何かしたいと思える卒業生たちがいることが、本校の強みです」（菅野先生）

「その強みを最大限に生かしたのが『安積セミナー』です。卒業生の中には安積高校を全国にもっと知ってもらえる学校にしたいという強い思いを持った者もいます。教師は卒業生のそうした思いと共に取り組みを進めています」（森下先生）

卒業生のアイデアで参加生徒の志望校の枠を広げる

11年度の夏のセミナーでは、講師に124期の卒業生も加わり、セミナーを軸とした卒業生からの支援の輪はますます広がりつつある。参加する生徒も1、2年生合わせて43人と増えた。

参加者は、東京大だけではなく、東京工業大、一橋大、慶應義塾大、早稲田大の志望者にまで幅を広げた。それらの大学に進学した卒業生も集まり、各大学の魅力を伝え合う講演も開いた。

「前年度のセミナーの総括の際に、『1、2年生の夏の時期で東京大に絞り込んだ指導でいいのだろうか』という意見が卒業生から出され、難関大志望者にまで幅を広げ募集するようにしました。卒業生が進路指導の『参謀』のような存在になりつつあります。こうしたアイデアを出してくれるのも、母校への思いが強いからだと思います」（森下先生）

卒業生自身も、企画力やプレゼンテーションスキルなどを鍛える場として、セミナーに主体的にかかわっている。

上位層は集団指導で、下位層は個別指導で引き上げる

難関大志望者のみというセミナーの形態は、今後も継続する考えだ。

「これまでは難関大志望者を個別に指導していました。しかし、弱気になって志望を下げてしまうことも少なくありませんでした。仲間の力に注目した集団づくりにより、高い目標の実現を貫く勇気を持ってほしいと思います」（野内先生）

セミナーに参加した生徒は、低学年のうちに卒業生と交流することによって、「どの時期に何を学習しておくべきか」ということが具体的に分かる。積極的に自学を進める一方で、授業に一層身が入るという。こうした主体的な学習への姿勢を他の学力層にも波及させたいと、加藤教頭は話す。

「難関大志望者層を集団指導で引き上げ、その姿を見た他の生徒が刺激を受け、学年全体が高い目標に向けて一つになっていくような学校を目指したいと思います。また、中・下位層に対しても、担任をはじめ、教師の個別指導が不可欠です。進路指導部と学年の有機的な結び付きによって、全ての学力層を引き上げたいと考えています」

「入学時、『まさか自分が東京大に入れるはずがない』と思っていた生徒でも、どんどん学力を付けて合格するケースは珍しくありません。生徒が互いの頑張る姿を見て刺激し合えるのが学校で学ぶ意義です」（菅野先生）

その鍵を握るのが集団づくりであると考え、卒業生の支援を活用した取り組みをますます発展させる考えだ。

「安積高校の卒業生として、大学の先にある将来や、自分が何をしたいのか、何をすべきなのか、よく考える集団に育ってほしいと期待しています」（野内先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2011年4月号指導変革の軌跡「**鹿児島県立鹿児島中央高校**」など
▶▶▶ ***http://benesse.jp/berd/*** → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）

神奈川県・私立

逗子開成中学・高校

学校改革

「我が子を入れたい学校に」地に足を着けた改革で進学校へと転身

◎1903年に私立東京開成中学校の分校として開校。「開成」の由来である中国の古典『易経』の「開物成務」の精神に基づき、自主独立の精神や目標を達成する強い意志を持つ人材の育成などを目指す。海洋教育や映像教育、国際交流など特色ある教育を展開する。

設立
1903（明治36）年

形態
全日制／普通科／男子

生徒数
1学年約250人

11年度入試合格実績（現浪計）
国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、東京大、東京工業大、一橋大、横浜国立大、京都大、首都大学東京、横浜市立大などに89人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、国際基督教大、上智大、法政大、早稲田大、立命館大など延べ980人が合格。

住所
〒249-8510　神奈川県逗子市新宿2-5-1

電話
046-871- 2062

Web Site
http://www.zushi-kaisei.ac.jp/

変革のステップ

背景
◎1980年代半ばから改革に着手、進学校となったが、やがて難関大合格者数は頭打ちに
STEP 1

実践
◎基礎学力試験の導入、総合的な学習の時間での表現力の育成などで、生徒の総合力を高める
STEP 2

成果
◎難関国公立大の合格実績は安定的に推移。全校体制の改革を通して、教師の一体感が生まれる
STEP 3

矢継ぎ早に改革を進め進学校へと変貌

逗子開成中学・高校は、神奈川県逗子市の海辺にある私立の中高一貫校である。30年ほど前までは進学面で注目される学校ではなかった。袴田潤一校長は、このように当時を振り返る。

「1980年代半ばまでは子どもも多く、取り立てて努力をしなくても生徒が集まっていました。そのため、教師の危機意識は薄く、進学実績を出さなければならない、学校としての特色を打ち出さなければならないという機運はほとんどありませんでした」

改革に着手したのは80年代半ばだ。そこから頭角を現し、90年代から難関大合格者が増え始め、2000年代には一定数の東京大合格者が輩出するまでになった。

けん引役となったのは、84年に理事長に就任した元徳間書店社長の徳間康快（やすよし）氏（故人）だった。同校の卒業生であった徳間氏は、停止していた中学校の募集を86年に再開。これを皮切りに、二学期制への移行、土曜講座の開講、海外研修の実施、英語教育の充実、映像教育の導入などの諸施策を次々と実行した。

進学実績が上向く中で、教師は更なるステップアップを目指す。早慶上智や東京大の合格者も出始めた90年代半ばに「国公立コース」を設け、国公立大進学を軸とした指導へ舵を切った。

この時、改革の原動力となったのが、徳間氏の理事長就任後に採用された若手教師たちだった。「改革1期生」である教師たちが30代前半で校務分掌の主任となり、学校の方向性を真剣に模索し始めたのである。

「好きなことに取り組みなさい」という理事長の一声に勇躍した教師たちは、「本当の進学校とはどのようなものか」「受験に特化しない総合的な力を身に付けさせたい」などと、学校の進むべき方向を語りあった。教務部長の三須浩幸先生は、次のように当時を振り返る。

「袴田現校長の『自分の子どもを入れたいと思える学校にしよう』が、私たちの合言葉でした。誰かが『こんなアイデアはどうだろう』と言うだけで、次の会議では別の誰かが具体的な計画を立て、すぐに実行に移すというように、良いと思ったことは即座に取り入れ実行しました。今思い返せば、確信を持って取り組んでいるというよりも、良い学校にしたいという情熱だけで動いていたような気がします。ただ、その勢いが学校を大きく前進させているという実感もありました」

逗子開成中学・高校校長
袴田潤一 Hakamada Junichi
教職歴・同校赴任歴共に28年。「教師自らが学問を愛し、生徒にその楽しさを伝える」

逗子開成中学・高校
三須浩幸 Misu Hiroyuki
教職歴・同校赴任歴共に27年。教務部長。「生徒の目線で考える、保護者が期待することを敏感に感じ取ることを大切にしています」

逗子開成中学・高校
宮﨑太郎 Miyazaki Taro
教職歴・同校赴任歴共に20年。教科研究委員長。「生徒の思いや考えを引き出し、意味を与えることで、自ら学び考える喜びを味わわせたい」

逗子開成中学・高校
土川尚彦 Tsuchikawa Naohiko
教職歴20年。同校に赴任して19年目。進学指導部長。「教員の熱意、生徒を信じる気持ちが生徒を動かす原動力となり、互いの信頼につながる」

逗子開成中学・高校
町田泰史 Machida Yasushi
教職歴・同校赴任歴共に9年。進学指導部。「人間関係を大切にすること、積極的に自ら学ぶ意欲を引き出すことを心掛けている」

基礎学力の重要性に気付き 教科の基礎とは何かを徹底的に議論

教師の勢いそのままに、同校は右肩上がりに進学実績を上げていった。ところが、00年代初め、一つの壁にぶち当たる。順調だった進学実績が頭打ちとなり、東京大合格者数が一人、ゼロという年が続いたのだ。授業の研さんに努め、徹底した補習指導や個別指導も行った。それでも、難関大合格がほぼ確実と思われていた生徒が次々と不合格に終わっていった。

「何が足りないのか」を分析した結果、見えてきたのは「基礎学力の定着」という課題だった。進学指導部長の土川尚彦先生は次のように話す。

「当時の私たちは、東京大のような難関大に合格させるには、難しい問題を解かせればよいという発想にありました。そのため、基礎学力が定着していない生徒に、応用的な問題ばかりを解かせ、指導が『上滑り』の状態になってしまい、入試に必要な地力を身に付けさせられていなかったのです」

基礎学力の大切さに気付く契機となったのは、センター試験での失敗だった。

「個別学力試験に対応できる高い学力を持つ生徒が、センター試験の基礎的な問題でつまずくようになったのも、この頃です。それがきっかけとなり、基礎学力とは何か、基礎学力を身に付けるためにどうすべきかという議論が始まりました」（三須先生）

それから1年、教科ごとに基礎学力とは何かを徹底的に話し合った。国語科の宮﨑太郎先生は当時を振り返って、次のように述べる。

「それまで、教科の指導は個々の教師の裁量に任され、『逗子開成の国語』という体系立てた指導は出来ていませんでした。この分野ではどの語彙まで覚えさせる必要があるか、最低限定着させなければいけない文法は何かなど、教科内で何度も討議を重ねて、指導の基礎を構築していきました」

基礎学力試験の導入で弱点を重点的に見直す

基礎学力定着のための取り組みも、新たに導入した。核となるのは「基礎学力試験」だ。中学1・2年生は各2回、中学3年生は1回。対象は国語、社会、数学、理科、英語の5教科で、最低限覚えてほしい内容を精選したマーク形式（数学のみ記述）のテストだ。問題数は100問。定期考査のような複数分野の融合問題ではなく、分野ごとに設問を分け、基礎的事項の定着を問う。

基礎的な内容だけに全員満点が理想だが、実際には難しい。重要なのは、生徒が試験結果を自分自身の弱点の克服に結び付けることだ。分野や単元ごとに正解率が出るため、生徒はチェックシート（図）を使って自分の理解が定着していない分野を把握し、重点的に復習できる。

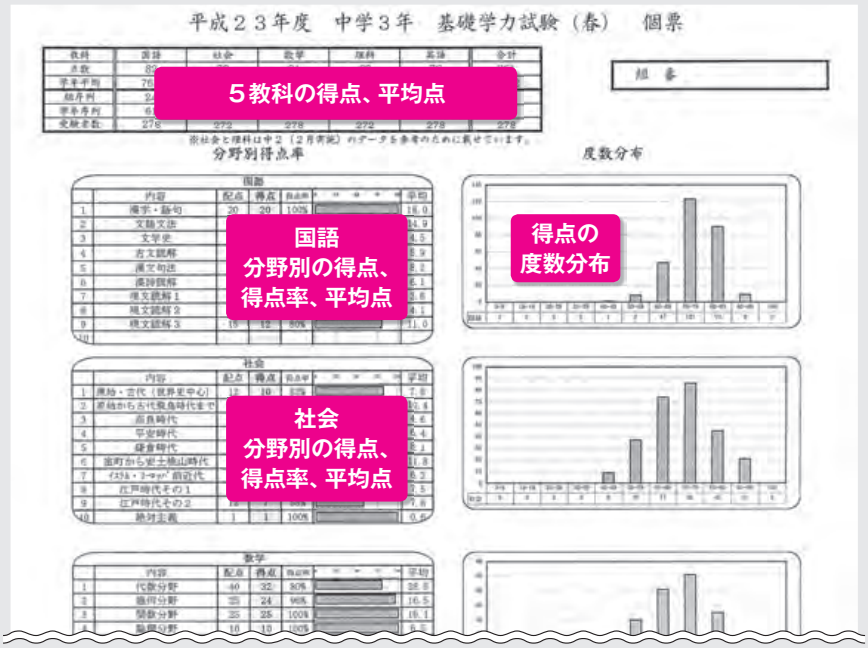
教科担任にとって試験結果の分析は、授業の見直しにつながる。正解率の低い分野については、直近の授業で、どこが分からなかったのかを生徒に直接聞くことで、生徒のつまずきをすぐに解消できる。また、次年度に同じ部分を教える時には、正解率が低かったことを前提に教え方を工夫できる。

中学3年生～高校2年生では、基礎学力試験に代わり、実力試験を行う。試験は基礎3、標準3、発展4の割合で、毎回、独自の問題を作成している。

多くの学校では、実力試験の問題は当該学年の教科担任が作問する。しかし、同校では、他学年の教師も作問に加わることがある。

「高校1年生ではこの問題が出来てほしいという観点から、高校3年生の教師が作問に加わることがあります。生徒の実力を知らない他学年の教師の方が、到達すべきレベルを客観的に判断し、作問できると考えています。生徒の正解率が低ければ、当該学年の先生方が指導を振り返るきっかけにもなるでしょう。他学年の教師が作問を行うことで、生徒の実力を測るだけでなく、当該学年の指導力まで問うことが出来るのです」（土川先生）

図　「チェックシート」



各教科とも、分野別に得点、得点率、平均点を記載、苦手分野を把握させる。また、教科の得点分布をグラフ化し、自分がどのレベルなのかも認識させる　＊学校資料をそのまま掲載

オリジナルのテキストによる総合学習で人間力向上を図る

学校を挙げて教科学力の向上を目指す一方、大学卒業後までを見越した総合的な力の育成も重視する。80年代後半から90年代にかけては、国際教育や情報教育など、その後にクローズアップされるような教育にも取り組んできた。「総合的な学習の時間（以下、総合学習）」が導入された時も、その趣旨に沿った教科横断的な学び、人間力の向上を追求してきた。

「人間学」と呼ばれる同校の総合学習は、表

現力やコミュニケーション能力など、社会で必要となる力の育成を目指した教育プログラムだ。中学校では基本的なコミュニケーションスキルから、スピーチやディベートなどの高度な表現力まで身に付ける。高校1・2年生では、企業と提携して校内でインターンシップを実施し社会の一端を体験した後、大学研究や「研究旅行」などを通して具体的な進路を考えていく。進学指導部の町田泰史先生は次のように述べる。

「コミュニケーション能力の向上もさることながら、授業や部活動からは分からない生徒の別の側面が見えてくるのも総合学習のメリットです。普段寡黙な生徒が、あるテーマになると、目を輝かせて話し始めるということは珍しくありません。生徒を多面的に把握するためにも、欠かせない取り組みになっています」

中学2年生のディベートでは、『世界が抱える100の問題』という独自の教材を使用している。これは、日本や世界で課題になっているテーマについて、教師全員が現状と展望を論じたものだ。環境、食糧、戦争から、万能細胞、オタク文化まで、幅広い論点について教科の専門を超えてディベートの題材を提供する。

「総合学習を通して積極的に自己を表現できる生徒が増えているのは大きな成果です。新課程では言語活動や活用する力が重視されていますが、そういった力を更に伸ばしていくために、今後は総合学習で培った双方向的な授業のノウハウを、教科の授業の中に応用していきたいと考えています」（宮﨑先生）

「自分たちの学校」という意識を持つことが重要

教師の指導力向上に不断の努力を払ってきたことも、同校の躍進を支えるポイントの一つだ。早くから授業公開を導入し、良かった点、改善すべき点について意見を交わし、年2～3回、全教科で勉強会を実施し、教科の専門性に磨きをかけている。授業公開や研究会には他教科の教師も参加し、教科内では気付きにくいアドバイスや意見を述べることも多い。教科の垣根を越えた交流が、同校の一体感を支えている。

若手教師が学校の取り組みについて自由に発言できるのも、同校の強みだ。英語科では3か月に1回、20～30代の若手教師が、新課程を視野に入れた新しいシラバスについて研究会を開いている。振り返れば、袴田校長や三須先生ら、当時若手だった「改革1・2期生」が改革をけん引してきた。若手教師に活躍の場を与える学校文化は、今なお引き継がれているのだ。

「新しい取り組みや学校の将来を考える時、私は先生方に『あなたが校長や教頭、主任だったらどうするか考えてください』と話しています。先生方が『自分たちの学校』という意識を持って日々の教育に取り組むことで学校全体の勢いが出てくるのです」（袴田校長）

例えば、登校時の立ち番をしようということになれば、全員でそれに当たるのも、教師一人ひとりに「自分たちの学校」という意識が根付いているからにほかならない。

11年度からは、若手教師が中心となり、全国の公立・私立の進学校を訪問し、ノウハウの吸収に努めている。若手の一人である町田先生は次のように語る。

「現在、本校は進学実績も安定していますが、決して現状に安住してはいけないと考えています。今回、全国の高校を訪問し、教育に対する先生方の志に刺激を受けると同時に、本校でも改革を更に前進させていかなければならないという決意を新たにしました」

改革当初、他校を視察せず試行錯誤してきた同校が、今、他校に目を向けるのはなぜか。

「安定した実績を出せるようになった今こそ、謙虚になるべきだと考えています。改革当初は、こんな学校にしたいという思いだけで取り組み、若さと勢いで実績を上げてきました。しかし今、入学してくる生徒の学力は向上し、保護者の期待もかつてないほど大きいものがあります。失敗は許されません。他校から多くを学び、更なる上昇のきっかけをつかみたいと思っています」（三須先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2011年6月号指導変革の軌跡「埼玉県・私立大宮開成中学・高校」など
▶▶▶ http://benesse.jp/berd/ → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）

群馬県立
吉井高校

総合学科の進路指導

毎日の活動を蓄積する「夢ファイル」の軌跡から自律する力を付ける

◎2000年度、全日制普通科から単位制総合学科となる。数年前から、2年次以降に選択する「系列」の見直し、部活動の活性化など諸改革に着手。「花いっぱい運動」や募金活動、地域活動支援センターと連携したボランティアなど、社会奉仕にも積極的に取り組む。

設立
1975(昭和50)年

形態
全日制・単位制／総合学科／共学

生徒数
1学年約150人

11年度入試合格実績(現役のみ)
国公立大は、群馬大、高崎経済大に3人が合格。私立大は、関東学園大、共愛学園前橋国際大、桐生大、高崎健康福祉大、埼玉工業大、城西大、駿河台大、大東文化大、大妻女子大、実践女子大、東京電機大、長野大、京都文教大などに延べ35人が合格。

住所
〒370-2104
群馬県高崎市吉井町馬庭1478-1

電話
027-388-3511

Web Site
http://www.yoshii-hs.gsn.ed.jp/

変革のステップ

背景
◎科目選択の指導が十分でなく、服装の乱れも見られ、地域住民の評価も低下。定員割れが恒常化する
STEP 1

実践
◎「系列」の見直し、ガイダンス室設置、ポートフォリオの導入などにより、履修指導・進路指導を充実
STEP 2

成果
◎最後まで諦めない粘り強さが身に付いた。就職希望者は全員内定を獲得。教師の意欲も向上
STEP 3

生徒指導と履修モデルの見直しから学校改革を進める

群馬県立吉井高校が改革に着手したのは、5年前。同校は2000年度に普通科から単位制総合学科に改編された。生徒の多様な進路志望に応える教育活動が期待されたが、改編から数年を経過した頃から指導体制のほころびが見え始めたという。当時、生徒指導主事だった鎌田英喜先生は次のように振り返る。

「選択科目は多いものの、生徒が将来の志望に応じて科目を選べるような履修モデルはなく、生徒の主体的な選択を促す指導も出来ていませんでした。生徒にとっては選択の幅が広すぎて、かえって履修科目を絞りきれない、あるいは苦手な教科は最低限しか選択しないという弊害が出始めたのです」

科目選択の問題と併せて、生徒指導上の課題もあった。同校は総合学科への改編時に、県内では珍しく私服通学が許された。科目選択の幅広さと共に自由な校風の象徴であったが、徐々に服装に乱れが出てしまい、地域住民の不評を買うまでになっていった。地域からの信頼は次第に低下し、定員割れが恒常化した。

そうした状況を打破しようと、改革は生徒指導から始まった。07年度、それまで式典以外は原則自由だった制服の着用を義務化した。特に、1年生にはスカート丈を短くできないデザイン

の制服を新たに採用した。

「生徒指導と学習指導は両輪です。生徒自身が生活をしっかりコントロールして、落ち着いた環境で学習することで、初めて自分の進路を真剣に考えられます。朝、制服を着てスイッチを切り替え、真剣に学習に向かわせることが、全ての取り組みの土台になると思います」（鎌田先生）

教育課程の見直しも進めた。履修モデルとなる八つの系列があったが、目指す進路との整合性が明確ではなかった。そこで、07年度入学生から系列を四つに絞り、必履修科目を増やして偏りなく基礎学力を身に付けられるようなカリキュラムとした。

群馬県立吉井高校校長
関根正史 Sekine Masashi
教職歴35年。同校に赴任して3年目。「教育とは夢を語ることである」

群馬県立吉井高校
鎌田英喜 Kamata Hideki
教職歴20年。同校に赴任して10年目。進路指導主事。「明るく、正しく、全力で取り組み、思いやりを大切にする人間を育てたい」

群馬県立吉井高校
小井戸正裕 Koido Masahiro
教職歴14年。同校に赴任して5年目。総合学科推進部長。「生徒が総合学科に入学して良かったと思える学習をさせたい」

「YP2011」を発足し総合学科としての特色を追求

総合学科の弱点を克服すべく改革を進めていったが、新たな課題が生まれた。総合学科推進部長の小井戸正裕先生は次のように話す。

「学習指導をより充実させるため改革を進めましたが、逆に総合学科らしさが薄れていった面もありました。学校が落ち着きを取り戻した後も定員割れは続き、地域や中学校に対して本校の何をアピールすべきか、次の一手を探しあぐねていました」

改革を加速させたのは、09年度に赴任した関根正史校長だ。有志の若手教師14人による「吉井プロジェクト（YP）2011」を発足させ、改革の具体案を策定し、3年計画で推進することにした。関根校長は次のように話す。

「教師には皆、自分の学校を何とかしたいという気持ちがあります。特に本校には、方向性を見いだせず考えあぐねているものの、改革に意欲的な教師が大勢いました。自ら動けるきっかけさえあれば、必ず改革は成し遂げられると感じました。また、本校は前身が普通科であるため、総合学科としての特色を出しにくい半面、しがらみがなく何にでも挑戦できる利点もありました。総合学科だからこそ、今の時代に求められるキャリア教育が実現できるのではないかと考えました」

最大の課題は、総合学科としての特色を打ち出し、いかに学校の魅力を高めるかにあった。教師は何度も話し合い、先進校の視察を重ねて、改革の方向性を模索した。

「良い教育を行うには良い教師を育てることが何よりも重要です。そこで大切になるのは、教師自身が自分で考えて行動し、自分たち自身で鍛えられるような環境をつくること。『YP2011』では、グループワークを『セッション』と呼び、先生方が自由に意見を述べ合えるようにしました。この経験が先生方の創造力や企画力、指導力を高める上で大きな土台となりました」（関根校長）

総合学科推進部主導で履修ガイダンスを強化

「YP2011」での討議の結果、次の2点が打ち出された。一つは普通科時代からの伝統である部活動を再び活性化させること、もう一つは総合学科の良さの見直しである。

部活動については、入学時点での意識付けにより加入率を高め、専門家を招いてのスポーツ栄養学やメンタルトレーニングの研修会の開催、部活動対抗の駅伝大会やボランティア活動の実施などで再活性化を図った。

総合学科の魅力を高める点については、「総合学科推進部」を設置し、制度を見直した。

最も急がれたのは履修ガイダンスの充実だ。それまで履修指導は担任が行っていたが、経験や生徒の志望する分野によっては指導しきれない部分もあったからだ。そこで、10年度、ガイダンス室を設置して担当教師を配置することで、いつでも生徒の履修相談に応じられるようにした。部屋には、受験や就職に関する資料と、生徒が科目選択をイメージしやすいよう、それぞれの授業で使う教科書や問題集、授業の様子を撮影したDVDをそろえた。更に、生徒の主体的な科目選択を促すため、系列の特徴や全科目のシラバスを記した「ガイダンスブック」を生徒全員に配布した。こうして、組織的な履修指導を行う体制を整えていったのだ。

「夢ファイル」に日々の活動をまとめて、振り返る

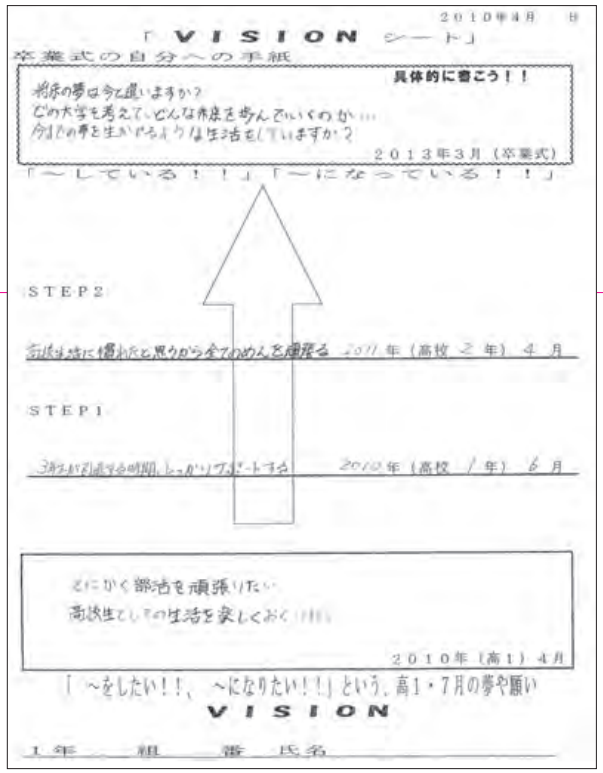
自分に合った進路を選ぶためには、生徒が自らを振り返り、夢や適性に応じた志望を描くことも大切だ。09年度の1年生から始めた「夢ファイル」は、日々の活動で何を感じたのか、それがどこへつながっていくのかといった活動の軌跡を、生徒自身でつかむためのポートフォリオだ。生徒は年間2冊のファイルを用意。1冊は時系列で記入の度にとじる仮のファイル、もう1冊は蓄積した用紙を学年末にカテゴリー別に整理するためのファイルである。

ポートフォリオというと、全ての生徒が決まった用紙を同じ順番でファイリングしていく場合がよく見られるが、「夢ファイル」にとじる用紙は基本的に生徒自身が決める。学校が配布したプリント、LHRで取り組んだワークシートや進路講話などの感想文、定期考査の結果や部活動の成績表などさまざまだ。その都度、取り組みに対する自分の感想を付せん紙に書いて貼り、何を感じたのかを振り返られるようにしておく。

ファイリングするのは、学校での活動にかかわるものだけではない。友だちと撮った写真や雑誌の切り抜きなど、個人的なものをとじてもよい。私生活を含めた、その時々の自分自身を振り返ってこそ、今の自分を把握できるからだ。

こうして順次ファイリングしていき、学年末には自分の進路を考えるために必要なものを整理用ファイルにまとめる。最終的には3年生での進路選択時の検討材料にしたり、AO入試や就職試験の志望理由書を書く際の資料として活用したりする。

図　「VISIONシート」



下欄に今抱いている夢や願いを、上欄に卒業時点の自分へのメッセージを書く。そのために何をすべきかをSTEP 1、2に記入する。具体的な進路が描けなければ「勉強と部活の両立」といった身近な目標でも可。目標に向かって日々の生活を充実させることが重要だ　＊学校資料をそのまま掲載

生活を自身でデザインできるようになることが重要

過去を振り返るだけでなく、将来を見つめさせることも「夢ファイル」の重要な役割だ。そのための書式が「VISIONシート」（図）である。「卒業式の自分への手紙」と題し、高校卒業時に向けて目標を立て、そのために何をすべきかを考えることが目的だ。学年統一の書式として年度初めに記入させ、「夢ファイル」の1枚目にファイリングする。

「ファイリングする一つひとつの活動を通して、現在行っていることと自分の将来ビジョンがどう関連しているのかを考えることが重要です。夢に向かって確実に進んでいると思えば、活動にも力が入ります。自分のしていることが夢とずれていると感じたら、ビジョンを実現するためにどうすればよいのか考えるきっかけにもなります」（小井戸先生）

「ＶＩＳＩＯＮシート」は、日々の活動が将来にどうつながるのかを考えられる、羅針盤のような役割を果たしているのだ。

「生徒の進路先を決めることだけが進路指導ではありません。何よりも大切なのは、毎日の生活を自分でデザインする姿勢や力を育てることです。近年、アイデンティティーを見いだせないために、自分の将来を描けない生徒が増えています。まずは、日々の生活を自律して送れる力を付けることが必要であり、高校生活はそのための最後の機会となります。先生方にはそうした危機感を共有してほしいと思っています」（関根校長）

教科と関連した課題研究で学びへの意欲を高める

総合学科らしさを追求するために、課題研究についてのテコ入れも図っている。かつては、3年生で週3コマ、テーマは生徒が各自で設定して行っていた。しかし、テーマが広がりすぎてしまうこともあり、数年前に内容を進路学習などに絞り、1単位に縮小していた。そうした状況にあった課題研究を「ＹＰ２０１１」の活動の一環として位置付け直し、拡充したのだ。

特徴は、化学Ⅱや数学Ⅲなど教科の延長として「課題研究・化学Ⅱ」「課題研究・数学Ⅲ」という科目を設置したことだ。正課の内容を発展させる形で課題を設定し、学びへの意欲を高める方策を探っている。

「課題研究は、テーマそのものよりも、学習を通して自分が感じた課題を自分なりに解決する過程こそが重要だと考えています。通常の授業に関連付けることで、教師は指導しやすくなり、生徒も授業で学んだことを発展させる体験を通して、学ぶ意味や喜びを感じるようになるのではないかと考え、このような課題研究としました」（小井戸先生）

11年度は、書道Ⅱと数学Ⅲに課題研究の科目を設けた。次年度以降も拡充し、13年度には生徒全員が履修できる体制を整える予定だ。

自分の夢に向かって粘り強く挑戦し続ける姿勢が生まれる

改革の成果は徐々に表れ始めている。09年度卒業生から地元の国公立大の合格者が増え、11年度はＡＯ入試を利用した大学進学を目指す生徒が前年よりも増えている。また、進路講話やガイダンス後に感想を書く場面では、これまでは「○○が分かった」という内容が多かったが、「夢ファイル」を始めてからは「大変そうだがやりがいを感じた」など、自分の将来に結び付けて具体的に考えを書く生徒が増えている。

「『ガイダンスブック』や『夢ファイル』などを通した指導の積み重ねにより、生徒が『ここに行きたい』という意志を強く持ち続けることが出来た結果ではないでしょうか。生徒には志望理由書や履歴書を何度も書き直させましたが、粘り強くついてくる生徒が増えたのも大きな変化です。与えられた課題を自分なりに解決しようとする姿勢は、社会に出てからも大きな力になると期待しています」（鎌田先生）

教師の行動力もより一層高まっている。改革が進むうちに、自分から改革プランを提案する者が増えているという。

「生徒を自立に向かわせる支援や働き掛けをする上で、総合学科は大きな可能性を秘めています。その特性を生かして生徒一人ひとりの学習習慣や生活習慣を改善し、部活動の奨励や社会人としての自己形成を図り、『総合力』を育成することが目標です。今後、総合学科でしかできない取り組みを通して、真のキャリア教育の実現にチャレンジしていきたいと思います」（関根校長）

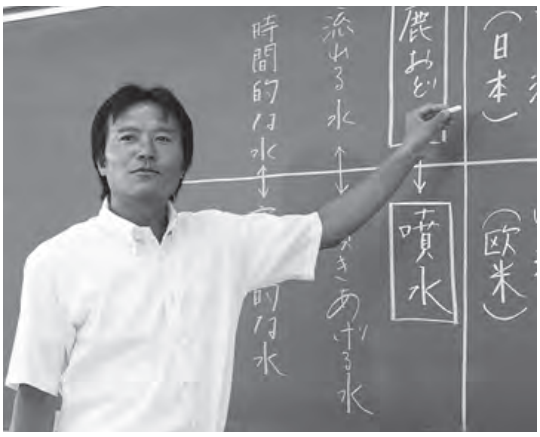
今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。
2010年6月号指導変革の軌跡「**大分県立日田三隈高校**」など
▶▶▶ *http://benesse.jp/berd/* → HOME > 情報誌ライブラリ（高校向け）

30代教師の転んでも起きる！

失敗やつまずきを転機に、授業力を高める！

常に目の前の生徒を見つめ 読解力を育成する授業づくりに努める

福岡県立宗像高校 青柳孝明（あおやぎ）先生 39歳



あおやぎ・たかあき ◎教職歴・同校赴任歴共に13年。担当教科は国語。1学年主任。
福岡県立宗像高校 ◎全日制／普通科／共学。11年度入試では、国公立大は、北海道大、筑波大、大阪大、京都大、九州大などに計223人が合格。私立大は、立教大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ470人が合格。

私が乗り越えてきたもの

「自分の授業」とは何か

「カリキュラム通りに授業を進めるだけで精いっぱい」。これが、宗像高校に赴任した当初の私の正直な気持ちでした。指導に自信がないため、黒板や教科書ばかりに目がいき、生徒の表情を見られずに授業をしていました。解説や間の取り方などを工夫したくても、生徒の様子を見ていない私には、どう改善すべきかも分からなかったのです。そんな指導では生徒の学力を伸ばせるはずもなく、私の担当するクラスは成績が低迷していきました。

「教師の責任を果たしたい」という思いから、先輩の授業を見学しました。厳しく指導しながらも生徒を笑わせる先生、国語の奥深さを感じさせるほど解説が緻密な先生など、どの先生もご自身のキャラクターを生かした授業をされていることが分かりました。私も自分の個性を授業に生かそうと思いましたが、そのためには、まず自分がどのような授業を目指すかを固める必要があると気付いたのです。

入試問題の分析不足を痛感

自分の教師としての理想を考えた結果、多様な日本語表現に触れる楽しさが感じられる授業を行い、生徒にとって人生の励みとなるような言葉を一つでも心に残してやることだと思い至りました。そこで、助詞や接続詞の使い方など国語の基礎を丁寧に教え、文章をしっかり読み取れるよう指導したのです。徐々に、生徒を授業に引き込めるようになり、成績も持ち直しました。

ところが赴任5年目、30歳で初めて3年生を担当し、再び壁に直面します。日々の授業づくりに集中するあまり、大学入試問題の分析が不十分だったため、過去問演習で生徒の目線に立てず、市販の問題集と大差ない解説しか出来なかったのです。質問はほとんどなく、「授業でわざわざ説明されなくても、一人で出来る」という、生徒の無言のメッセージのように感じられました。

「自校の生徒のための解説」が出来なかった

そして、これからも挑み続ける目標

多角的な解説を目指して

指導力不足を痛感した私は、国公立大、私立大を問わず多くの入試問題の分析に取り組み、解説の仕方を工夫しました。「多角的に解説できなければ、生徒たちの求めに応えられない」と必死でした。その成果は、やがて生徒の反応に表れました。授業中の質問が増え、より適切な答えを求める熱意が生まれてきたのです。「この文意の解釈でつまずくのではないか」と、自校の生徒の目線に立って予測しながら解説することによって、納得感を得られたからだと思います。

また入試問題研究を通して、3年次までにどの程度の読解力を付けておく必要があるかも見えてきたため、逆算して1・2年次の指導を見直しました。文章構造を的確に把握できるよう、対比表現や比喩、起承転結などの分析に時間を掛けるようになったのです。

赴任から10年ほど経ち、その間に何回か学年を持ち上がる過程で、生徒の国語力の変化にも気付きました。ふさわしい接続詞を選べなかったり、簡単な漢字を間違えたりする生徒が目立ち、古文の現代語訳を示しても、使われている現代語の意味が分からないという生徒が増えているのです。そうした生徒たちを前にして、基礎から念入りに教えることの重要性を改めて感じました。文章の前後関係、単語や漢字の意味をまず質問し、生徒の理解度を確かめた上で解説をすることを心掛けるようになりました。

生徒の内面を豊かにしたい

生徒が変われば、求められる授業も変わります。教師には、目の前の生徒の力を伸ばす使命がある。その思いはますます強くなっています。最近は特に、国語への苦手意識を持つ生徒が増えていると感じます。論理的に読み解く訓練をする前から、「国語の勉強にはセンスが必要」などと言って諦めてしまっている生徒もいます。

文章をしっかり読み解いてこそ、多様な表現力が身に付きますし、文章を通して人生の様々な局面を疑似体験することも出来るのです。国語という教科の持つそうした魅力を少しでも多くの生徒に伝えたい。そこで、赴任14年目の2011年度は従来の指導に加えて、筆者の主張を考えさせる時間を増やしています。生徒それぞれが自分の答えを探しながら文章を追うことで、筆者の心理や課題意識をより深く捉え、生徒の内面を豊かに出来ればと考えています。

また、国語の読解力は全教科の基盤となります。不足すれば他教科の理解にも影響し、どの教科も学力が伸び悩む結果になりかねません。常に目の前の生徒を見つめ、いかに読解力を伸ばすかを追究していきたいと思います。

全ての教科の基盤である読解力をいかに育むか

青柳先生の授業実践 Q&A

Q 文章の要旨を的確に把握し、自分の言葉で表現する力を付けるために、授業でどのような工夫をしていますか？

A 授業で扱った文章を400字詰めの原稿用紙1枚に要約させています。要約は、その文章を扱う最後の授業の約15分を使って、1年次から3年次まで全学年で行います。

また、採点のポイントをまとめたプリントを配付し、生徒はそれを参考に互いの要約を添削・採点します。友だちの要約を読むことで、「こういう表現もあったのか」と気付くことも多いため効果的です。更に、記述内容が同じでも表現によってニュアンスが微妙に異なることを知る機会にもなると考えています。

Q 大学入試では課題文が長いため、文章を速く読む力が求められます。その力を養うために授業でどのような工夫をしていますか？

A 1・2年次の授業の2回に1回、冒頭5分間を使って、速読の練習をしています。入試問題から取った3000〜4000字の課題文をプリントにして生徒に配付し、時間内に出来るだけ多く繰り返し黙読させています。個人差はあるものの、2年間続けることで、読むスピードは着実に上がっていくと実感しています。

1年次は読むことに集中させますが、2年次にはプリントに1題、入試で問われた選択問題を載せています。受験に対する意識を高め、漠然と読むのではなく、設問に沿って読解させる狙いがあります。

メッセージをお寄せください

◎更なる授業力の向上を目指す青柳孝明先生へメッセージをお願いします。同じ課題を抱えている同世代の先生の共感の言葉、独自の授業スタイルを確立された先輩からの応援やアドバイスなどを自由にお寄せください。編集部より、青柳先生へお届けします。

下記のe-mailアドレスにメッセージを送信ください

▼

view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

バックナンバーは Benesse 教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。http://benesse.jp/berd/→HOME>情報誌ライブラリ（高校向け）

教師、生徒の準備期間としての3年生0学期の指導

時期の特徴 生徒は入試を意識し始めているが、志望はまだ熟考されたものではない。部活動で多忙なこともあり、進路に関する意識付けを行っても具体的な変化として表れにくい。

指導のポイント 3年生0学期には生徒一人ひとりへ「進級前の優先事項」を具体的に示す。また、教師にとっても3学年団への準備期間と位置付け、生徒と共に意識を高めていく。

※このコーナーは、高校の先生方との検討会を経て制作しております。

対教師へのデータ

センター試験分析と分野別成績推移から3年生に向けての具体的な戦略を立案

目的別データ活用

1 センター試験分析で「3年生担任」を疑似体験する

→ 図1

◎3年生0学期の生徒への意識付けとして、センター試験に挑戦させる学校は少なくない。センター試験の活用を生徒の意識付けだけで終わらせるのではなく、自校の3年生の結果と、全国平均を比較し、自校の弱点を分析することで、今後強化すべき指導内容を立案することが重要だ（図1）。分析した内容は、生徒向けに配布するものと自校の弱点などをまとめた教師保管用に分けておく。3年生0学期には、教師も3年生に向けた準備を進めておく必要がある。

2 分野別成績推移から、学年全体を伸ばすための学力層別戦略を立案

→ 図2

◎学年全体の学力を伸ばしていくには、各学力層に向けた具体的な指導の戦略が必要だ。上位層、中下位層それぞれの弱点科目・分野を模試結果で分析し、4月以降、授業や補習、家庭学習で重点的に取り組ませるべき科目は何かを明らかにする。そして、教科担任も巻き込み、次年度の指導方針の素案へとまとめていく。また個別の生徒に対しても「最低限これだけはやっておこう」と具体的なアドバイスを行っていく必要がある。模試の分野別成績推移から弱点を把握し、「文法が弱いから、まずそれを教科書で優先的に復習するように」など生徒が動きやすいように声を掛ける。

データを用いた指導の流れ

STEP 1
◎自校の3年生のセンター試験の結果と全国平均を2学年団で分析し、弱点を踏まえて、今後の指導方針を立案していく（図1）

STEP 2
◎模試の単元別の推移（図2）を基に生徒個々、更に学年全体の弱点を分析、志望校検討会など学年全体が集まる場で共有する

STEP 3
◎図1と図2から、弱点克服のために3年生での授業や補習の方針などを立案する

STEP 4
◎図2を用いて個々の生徒へ弱点克服のための具体的なアドバイスを行っていく

図1　2学年団のためのセンター試験分析

ダウンロード

英語

平均点　全国 122.8　本校 140.7

◎問題別正解率（上段…全国平均、下段…本校平均）

問題番号	設問		正解率
1	A	1	18.4 / 20.1
		2	26.3 / 20.6
		3	47.4 / 44.6
		4	57.5 / 68.5
	B	1	50.3 / 64.5
		2	29.8 / 46.7
		3	47.6 / [illegible]

問題番号	設問		正解率
3	A	1	63.2 / 72.5
		2	88.9 / 92.2
	B	1	78.4 / 85.0
		2	75.4 / 72.3
		3	77.0 / 78.4
	C	1	69.4 / 68.2
		2	46.4 / [illegible]

出題傾向分析

第１問Ｂのアクセント問題は、見出し語がない形式での出題になった。また、第６問では段落構成を問う出題が消え、段落の要旨を並べ換える問題が出題された。出題分野は、昨年度同様発音・アクセントから、読解、視覚情報を含む英文理解までの幅広い領域となっており、多岐にわたるジャンル・形式の出題であった。素材文の語数は第５問で 200 語程度増加し、全体としても昨年度よりやや増加したものの、全体の難度はやや易化したといえる…（以下省略）

次年度に向けて必要な指導

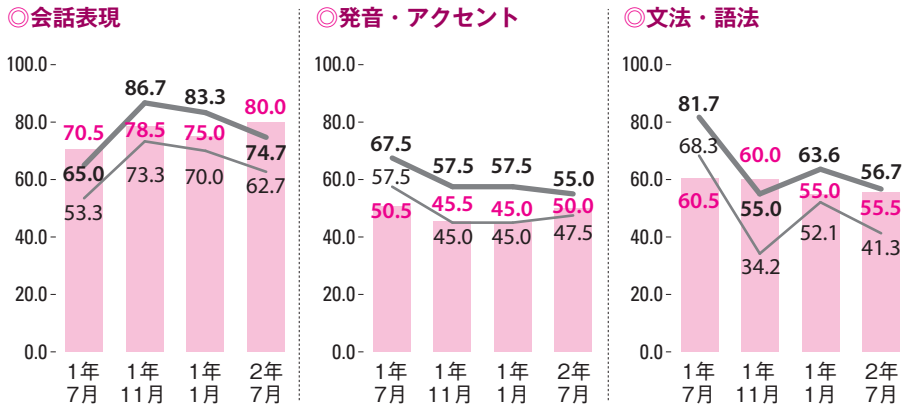
内容的には教科書をしっかりと学習しておけば十分に対応できるレベルである。だが、読み込む英文の量や設問数が多く、解答時間を短いと感じる生徒は本校でも多かった。演習の段階で、時間を区切って問題を解かせる指導が今後はより早期から必要であろう。また、読解力養成のため、数多く英文に当たらせているが、段落ごとに内容をまとめながら読むように指導を徹底していきたい。更に、英作文の添削においても、文法的に間違っていないかばかりに関心がいきがちだが、表現レベルでもネイティブが日常的に…（以下略）

図2　優先順位の高い学習分野を把握するための分野別得点率

ダウンロード

英語

＊太線は偏差値60以上の平均得点率、細線は偏差値59～55の平均得点率。棒グラフは生徒個人の得点率推移。



国語、数学、英語の３教科について、分野別成績推移を基に個々の生徒が最優先に取り組むべき分野を明らかにしていく。全国平均と比べて成績が低い分野や、成績が下降傾向にある分野の優先順位を上げて学習させる。

ダウンロード　このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
http://benesse.jp/berd/　→HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）＞生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス〈プラスαの指導〉

取り組みを線でつなげてモチベーションを上げる

３年生０学期の指導の大切さは、高校現場では共通理解を得られつつある。だからこそ、この時期に進路講演会などが行われることも多いが、生徒にとっては一時的な意欲の向上で終わってしまうことも少なくない。模試の復習や面談などを活用して指導と指導を線でつなぐことで、モチベーションを持続的に向上させ、受験生への切り替えを図っていきたい。

経験が少ない教師に、「入試」の準備の徹底を行う

新３年生は誰が受け持つか、この時点では分からない。とはいえ、多くの場合、２学年団の半数前後が持ち上がる。学年団に若手や赴任歴の浅い教師が多い場合、２年生の指導と３年生の指導がどうリンクし、どんな準備が必要なのかをこの時期から明確にし、３年生の担任となる準備を進める。

＊2010年10月号　本企画「図１　３年０学期学年団の指導の目線合わせシート」参照

志望校検討会で教科担任の役割を明確化

志望校検討会では生徒一人ひとりの成績を評価するが、それだけに終わらず、担任、進路、教科それぞれが３年生０学期にどう行動していけば良いか、方向を確認する重要な場と位置付けたい。３年生４月をどんな学力状況で迎えたいのか、そのために教科担任が行うべき指導は何かを明確にすることが必要だ。３年生になる前に弱点を把握し、指導の方針を固めたい。

対生徒へのデータ

進路志望調査票と面談指導をきっかけに進路を真剣に調べ、考えさせる

目的別データ活用

1 進路志望調査票で、生徒に進路を考えるきっかけを与える

……> 図3

◎２年生は志望校決定などの進路選択が気になりながらも、部活動などに追われている状況だ。そのため、３年生０学期を迎えても、進路についてしっかりと考える機会を得られていない可能性がある。現在の志望校について詳しく調べ、本当に自分が行きたい大学かを考える場を与えることが大切だ。その際、上位層に関してはどこを志望しているのか「大学名」を確認し、中下位層は「書けているかどうか」に着目して次の指導を考える。具体的な大学名が書けていない場合でも、「なぜ書けなかったのか、どう迷ったのか」という視点から面談することで生徒の思考が深まる。また、併せて「志望校は変えられる。むしろ３年生になる前に試行錯誤することが重要だ」ということも伝えたい。

2 進路志望調査票を面談につなげ、進路意欲を向上させる

……> 図4

◎生徒に進路志望調査票を詳細に書かせる以上、教師はそれをフルに活用し、指導へとフィードバックしていかなければならない。生徒が書いた志望を子細に把握し、生徒ごとにどの部分の検討が不十分かを分析し、声掛けにつなげていく。また、面談では、生徒に自ら語らせるよう働き掛け、揺さぶり、徐々に志望を「本物」に固めていく。

データ活用の流れ

STEP 1	STEP 2	STEP 3	STEP 4
◎図３を見本用紙と共に配布して、生徒に１週間ほどで記入させる	◎生徒の記入した図３をコピーし、１枚は教師用、もう１枚を生徒用とする	◎他の生徒がどれくらい志望を高めているかを意識させるために、LHR などに生徒同士で図３を見せ合う時間を設ける	◎各生徒が記入した図３を図４などの観点から分析し、面談での指導につなげていく

ウェブサイトからダウンロード！

生徒指導・進路指導ツール集

Benesse® 教育研究開発センター

http://benesse.jp/berd/

生きたデータの徹底活用 検索 クリック！

HOME→情報誌ライブラリ（高校向け）→生徒指導・進路指導ツール集でご覧ください

加工可能な資料がダウンロードできます！

今回のテーマと関連する過去のバックナンバーも併せてご活用ください！ 右のウェブサイトでご覧いただけます。

●２００７年12月号
「２年生を受験生にする『３年０学期』の意識付け」

●２００９年10月号
「『３年生０学期』の教師の姿勢、生徒への意識付け」

●２０１０年10月号
「生徒と教師の助走期間としての３年生０学期の意識付け」

図３　入試までの１年を考え始めるための「進路志望調査票」

ダウンロード

２年＿＿組　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

将来の目標（　バイオテクノロジーを学びたい　）

		第１志望	第２志望	第３志望
大学		千葉	新潟	
学部・学科		園芸・応用生命化	農・応用生物化	
国立・公立・私立・そのほか		国立	国立	
入試日程		前期	前期	
定員		32	35	
難易度（B判定の偏差値）		60（進研模試）	55（進研模試）	
この大学・学部を選んだ理由		家から通える 大学院進学率が高い	米に関する研究が盛ん	
入試科目・配点	センター試験 英語（うちリスニング）	200（40）	200（40）	
	国語	200	200	
	数学①	100	100	
	数学②	100	100	
	地歴（受験する科目に配点を記入）			
	公民（受験する科目に配点を記入）	100	100	

志望校に関して調べさせる項目は、左記の他には所在地、大学の特徴、難易度、推薦・ＡＯ入試の有無、就職・進学状況などが考えられる。

何を書けば良いか分からない生徒もいるので、事前に記入例が入った調査票を配付し、選択科目や配点に関する基本的な解説をしておく。

図４　「進路志望調査票」を生かす面談のポイント

ダウンロード

■志望意図を確かめ、可能性を広げる

「人を助けたいから医学部を志望した」と記入している場合、なぜ薬学系や医療技術系でなく医学部なのか、工学部や理学部で「人助け」というキーワードで学べる学問はないかなどを聞き、視野を広げながら志望を「本物」にする。

■志望学部にばらつきはないか

農学部、法学部、工学部など、志望学部に一貫性が乏しい場合、どうしてそのような志望になっているのかを聞く。学部（やりたいこと）よりも、大学名のイメージで進路を決定していないか、受験科目なども考え志望しているか注意を払いたい。

■難易度のバランスは適当か

志望校は「挑戦校、実力相応校、安全校」からバランス良く選ぶのが原則。この時期はまだそこまで考えている生徒は少ないが、１年後の入試までにはこのような観点から志望を広く考えられるよう準備をしておくことが必要であることも伝える。

■受験科目と自身の履修歴にミスマッチはないか

理科、地歴公民については志望大が課している科目と自身の履修歴にミスマッチがないか確認する。また、センター試験と個別学力試験の配点比率、傾斜配点の見方を示し、各大学の入試でキーになる科目が何かを読み取る力を身に付けさせる。

ダウンロード　このマークのある図版は、加工可能なデータとして、小誌ウェブサイトからダウンロードできます。
http://benesse.jp/berd/　→HOME＞情報誌ライブラリ（高校向け）＞生徒指導・進路指導ツール集

現場からのアドバイス〈プラスαの指導〉

生徒の「第1志望」に教師が徹底的にこだわる

第１志望に対する自分なりの決意が固まっていない段階で、第２、第３志望を考えることは難しい。「しっかりとした理由と共に第１志望を挙げられるようにしよう」と教師間で目線合わせをすることが必要だ。たとえ難易度のバランス良く複数校を挙げられていても、志望理由に一貫性がなければ４月以降、生徒の志望が大きく揺れ動いてしまう恐れがある。

模試の復習を校内テストに取り入れる

３年生０学期の学習計画を立てる上で、11月の模試は重要な指針となる。11月模試への意識を高めるため、誤答が多かった７月模試の問題を事前に告知した上で校内テストで出題するのも良いだろう。模試を見直す習慣が付いていない層には、11月模試に向けた良い学習機会となるはずだ。また、模試の見直しノートについても、見本を見せながら再度説明したい。

諦めさせない指導を３年生０学期から開始

３年生になると「これからの巻き返しは不可能」と考え、志望を変更したり、苦手科目を捨てようとしたりする生徒が現れる。少なくとも夏休みいっぱいは粘り強く学習に取り組ませるためにも、３年生０学期のうちに苦手科目の学習に着手させる必要がある。積み上げて学習してきたという実績が生徒の自信になり、易きに流れるのを防ぐことが出来る。

「心の理論」を土台にし認知発達の過程を解明する

京都大大学院教育学研究科 教育科学専攻 子安増生研究室

発達心理学は、知覚や言語、思考、知能などが年齢と共に、どのように発達していくのかを心理学の観察・実験により明らかにしていく心理学の一分野である。発達心理学を専門とする京都大の子安増生教授は、日本で初めて「心の理論」に着目。幼児期から児童期にかけて、他者の言葉や行為の背後にある意図を理解できるようになるという子どもの発達過程を明らかにしてきた。その研究成果は、教育・精神医学・脳科学など多方面に応用されつつある。

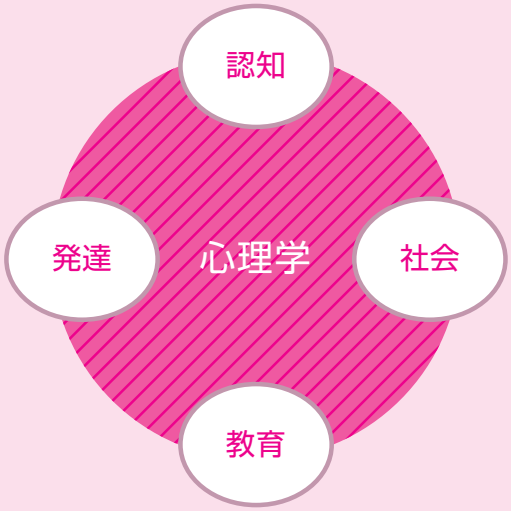
フローチャートで分かる子安研究室

大学院生の主な出身分野

教育学
心理学
など

◎修士課程のみの専修コースでは、教育や心理の他に、文学や経済、情報などのさまざまな分野から学生が集まる。博士課程を目指す研究者養成コースは、この分野の論文の提出が必須であるため、他分野からの進学は難しい。

研究にかかわる学問分野と研究内容



◎認知心理学、発達心理学、社会心理学、教育心理学など、子どもの発達や教育にかかわる分野との接点が多い。心理学は文系学問でありながら、科学的・実証的な理系的要素が濃い。目的に応じて観察、実験、質問紙調査、インタビューなどの調査法を使い分ける。

研究成果と社会のかかわり

臨床発達心理士の育成
学校現場や臨床現場での応用
啓蒙活動・政策提言
など

◎日本発達心理学会が中心となり臨床発達心理士を育成。実践活動を通じて学術的成果を直接臨床の現場に反映させる。講演活動や書籍の出版などによる啓蒙活動、官公庁への政策提言や資料提供などがある。

人に対する興味・関心と科学的素養が必要

心理学が求める学生像

- 人に対する興味を持っている人
- 個人や社会の幸福に貢献したい人
- 科学的素養を備えた人

心理学の分野に進む上で必須の素養は、人に対して関心を持っていることです。「人間は不思議だ、面白い、なぜこんなことをしているのだろう」というように、人間の心や行動への興味を常に持っていることが何よりも大切です。心理学は人の役に立ってこそ意味のある学問です。自分の興味・関心の赴くままに、理論ばかり追求していても意味はありません。単に事実を知るだけではなく、困っている人を助けたい、自分自身を高めたいというように、どうしたら実践に生かせるかを常に考え続けることも重要です。

心理学は、日本では文系の学部に属することが多い学問ですが、理系的な要素もあり、特に統計学は必須です。高度な知識は必要ありませんが、ある程度、抵抗なく数学の授業を受けられる人の方が向いています。アメリカやヨーロッパの大学には、心理学が理学部に属していたり、心理学専攻の前提として高校時代に物理や化学の履修を求めたりするところがあります。世界で活躍するためには、科学的素養も欠かせないことを忘れないでください。

高校生へのメッセージ　学問は日々の積み上げが大切です。積み上げたことが成果に表れるまでには時間がかかるかもしれませんが、先回りをせずに地道に進んでほしいと思います。大学で学ぶ内容は全て、高校の基礎が土台となりますから、その時に学ぶべきことをしっかりと学び、進むべき進路を定めてください。

子安増生 教授 Koyasu Masuo

京都大大学院教育学研究科教授。副研究科長、グローバルCOEプログラム拠点リーダー。京都大大学院教育学研究科博士課程中退。愛知教育大心理学教室助手、同助教授、京都大教育学部助教授、同教授を経て現職。現在、日本発達心理学会理事長を務める。主な著書に『心の理論』（岩波書店）、『幼児が「心」に出会うとき』（有斐閣）、『子どもが心を理解するとき』（金子書房）などがある。

研究を志したきっかけ

少人数のセミナーで心理学の面白さ、奥深さに目覚める

将来の進路として心理学を意識し始めたのは高校2年生の時です。北杜夫さんの小説に感銘を受け、[1]精神医学に興味を持ったこと、文理にまたがる学際性に魅力を感じたことがきっかけです。

私が京都大に進学した頃は大学紛争の真っ最中でした。全共闘の大学封鎖により、入学から数日で授業がなくなりました。この時、学生が授業を受けられないことを心配した先生方が、自主講座を開いてくれました。本を読んだりディスカッションをしたりするセミナー形式で、学生はさまざまな講座を受けられました。何しろ、先生は教えることに、学生は学びに飢えていました。講座は濃密な時間になり、私は学問の面白さに目覚めました。もし基礎科目を一斉授業で学んでいたら、あれほど勉強には打ち込まなかったかもしれません。専門分野の高度で刺激的な話を少人数で聞くことで、心理学への関心がより高まったのです。

現在の研究テーマ

子どもが他者の心を理解するプロセスを実証的に研究

大学院で発達心理学を修め、研究者の道を踏み出した私は、1994年、留学先のイギリスでその後の研究活動を方向付ける[2]「心の理論」と出合いました。他者の気持ちを理解したり心の動きを推測したりする心の機能のことで、80年代半ばにイギリスで発展した考え方でした。

心理学の世界では長らく[3]行動主義と呼ばれるアプローチが主流でした。人の心は直接読み取れないので、外に現れる行動を観察し、分析する手法です。そこでは、生体への刺激とそれに対する反応を関数関係で捉えることが重視され、心の中はブラックボックスのままでした。

ところが、50年代後半、心の中を真正面から捉えようとする考え方が生まれました。コンピュータがデータを読み取るためのプログラムを必要とするように、人にも外部から情報を受けて判断や意思決定を行う「心のプログラム」があり、その構造の解明を目指そうとしたのです。

刺激と反応の関係を重視する行動主義から、心の働きをモデル化しようとする[4]認知主義への転換でした。

「心の理論」は「心のプログラム」を土台に生まれた考え方です。人は他人の心を推測しながら人間関係を保ちます。しかし、幼児期には相手の心を考えることが出来ません。母親に頼まれて買い物に行き、店員に「何が欲しいの」と聞かれて「お母さんに頼まれたもの」と答えてしまったりするのです。自分の知っていることと相手が知っていることの区別がつかない。つまり「心の理論」を獲得していないためにこのようなことが起こるのです。

では、子どもはいつ「心の理論」を獲得するのか。獲得には何が必要なのか。それを実証的に解明するのが私の研究です。

研究概要

自閉症の理解や教育にも広がる研究成果

帰国後、「心の理論」を研究テーマにした私は、さまざまな調査や実験を重ねました。その結果、「心の理論」は3～9歳にかけて2段階に発達することが分かってきました。

第1段階は4～5歳。自分の知っていることと知らないことの区別がつくようになります。この時期、子どもが嘘をつき始めるのはそのためです。第2段階は9歳くらいです。AさんがBさんのことをどう思っているかが分かるというように、他者が別の誰かについて考えていることを推測できるようになります。子どもが親に対して秘密を持つようになるのはこの頃です。

自閉症の子どもの場合、10歳を過ぎても自他の区別が出来ない場合が多いことが研究により分かっています。自閉症の子どもは自分の関心に従って動くことが多く、落ち着きがなく自分勝手に見えてしまうことがあります。これは、自分が周りからどう見られているか分からないためで、悪気があるわけではありません。このような自閉症に対する理解は、近年、学校現場や社会に浸透しつつありますが、背景には「心の理論」の研究が貢献しているのです。

発達研究は教育の在り方にもヒントをくれます。幼児が人を描く時、顔から直接、手足がある姿を描くことがあります（図）。これは胴体があることを知らないのではなく、子どもながらに胴体を「省略」しているのです。子どもは何でも必要なものから学習し、必要ではないものは省略する。逆に、必要な時期がくれば自然と理解できることが多い。ですから、早い時期から無理に知識を教え込む必要はなく、学習者が必要な時期に必要なことを理解できるよう手助けすることが大切なのです。

心理学は人がより良く生きるための実践的な学問です。そして、何よりも自分自身がポジティブに生きるためのヒントを提供してくれます。人の役に立ちたいという使命感と向上心を持つ人には、きっと魅力を感じてもらえると思います。

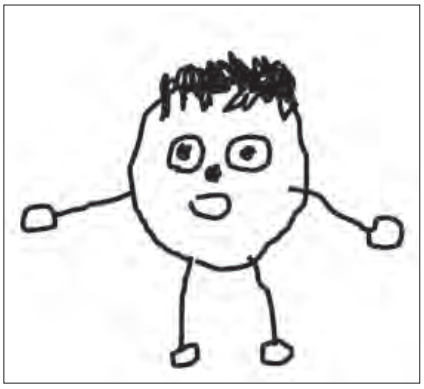


図　国や文化の違いにかかわらず、世界中の幼児が共通して描く「頭足人（とうそくじん）」と呼ばれる絵

用語解説

❶精神医学
人間の精神活動にかかわる病理を対象とする医学の一分野。小説家の北杜夫は精神科医でもあり、『どくとるマンボウ航海記』『夜と霧の隅で』など、医師を主役とした小説を数多く手掛けた。

❷心の理論（Theory of Mind）
人が他者の心の動きを推測したり、自分とは違う考え方を持つことを理解したりする心の機能のこと。1978年にアメリカの心理学者D・プレマックとG・ウッドラフが提唱し、発達研究は80年代半ば以降にイギリスを中心に発展した。

❸行動主義
人間を外から観察し、外に現れる行動だけを研究対象にすべきであるとする心理学のアプローチ方法の一つ。1913年にアメリカの心理学者ワトソンによって提唱された。心理学の科学的側面を高める役割を果たしたといわれる。

❹認知主義
コンピュータ科学の発展に伴って生まれた考え方で、外からは観察できない心の仕組み（心のプログラム）の解明を目指す。1956年にアメリカのダートマス大で開催された人工知能のシンポジウムが出発点といわれる。

情動知能（EQ）と精神的な成長の関係を解明

野崎優樹さん
Nozaki Yuki
京都大大学院教育学研究科
教育認知心理学講座修士課程1年
（名古屋市立菊里高校卒業）

Q なぜこの分野に進んだのですか

A 私は元々、文系と理系のどちらにも興味があり、高校時代は現代小説からサルトルの哲学書、アインシュタインの解説書まで、幅広く読んでいました。

将来について真剣に考え始めたのは、1年生の終わりにあった文理選択の時です。これからの社会を考えた時、科学技術の進歩はもちろん大切ですが、人間そのものが成長しなければ良い社会は実現しないのではないかと考えました。そして、人間そのものにアプローチする学問、人類の進歩に携われる学問を探した末に行きついたのが心理学でした。

子安先生の研究室に進んだのは、「心の理論」の研究が、人間の情動知能（EQ）を高めることに役立つと考えたからです。

学部時代、人の成長には自分の心をコントロールする術を身に付けることが必要なのではないかと、私は考えました。そのために心理学が出来ることは何かを考え、「心の知能指数」といわれるEQに着目したのです。EQを高めることで人が精神的に成長し、社会全体の向上につながるのではないか。それを追究したいという思いから、「心の理論」について深く学ぼうと決めました。

Q 現在の研究内容を教えてください

A 難しい仕事やストレスを克服すると、人々のEQは上がるのではないか。このような仮説を立て、人が困難なことに対してどのように取り組めばEQが向上するのかを、質問紙調査と実験を中心に調べています。

この研究の難しさは、個人差が大きいことです。実験や調査から得られた結果に対して、どこまでがその人の個性で、どこまでが普遍的なのかということを見極めなくてはいけません。実験や調査の結果を踏まえ、いかに普遍性のある理論を組み立てるか、理論に合わない部分をどのように説明していくのかが一番難しいところです。

一方で、予想通りの結果が得られた時や、自分の仮説通りの結果が得られた時はうれしく、やりがいを感じます。そこは、文系でありながら理系の要素が強い心理学ならではの魅力の一つだと思います。

Q 高校生へのメッセージをお願いします

A 一つのことにこだわって、一生懸命考える習慣を付けると良いと思います。そして、考えても分からなかったら積極的に行動する。他の人に話を聞いたり、本を読んだりする。それでも分からなければ、また考えて行動するということを繰り返すうちに、おのずと答えは見つかるはずです。

たとえ、自分が望むような答えが得られなかったとしても、疑問を抱えながら考え、行動し続けるうちに見えてくるものはきっとあるはずです。大切なのは考えることを諦めて放棄したりせず、分からない気持ちを大切にしたまま、前へ前へと進み続けていくことではないでしょうか。

私の高校時代

世界史の授業から人生の哲学を学ぶ

●高校時代に最も影響を受けた先生は、3年生の時に世界史を習った先生です。それまで、私にとって世界史は暗記科目でした。ところが、先生の授業を受けて、国同士のつながり、時代間のつながりが見えてきて、ダイナミックに歴史を捉えられるようになりました。過去の人々の努力、成功や失敗があって現在があることを、先生の言葉の端々から感じ、過去の人が何を考えたのかを知ることが、未来を切り開く創造力につながることに気付きました。これは、今も研究活動の大切な土台となっています。

今思うと、先生は自分なりの「哲学」を持っていたのだと思います。直接聞いたことはありませんが、借り物ではない価値観を持っていた。私も先生のように自分自身の価値観を持って生きていきたい。それは、研究者として必要なだけでなく、人生の困難を乗り越える上でも、大きな力になるはずです。

新課程移行期の課題と実践

― 熊本県立第二高校の事例から ―

ほぼ10年に１度訪れる課程移行期には、
移行期ならではの共通の課題が存在するのではないか。
今号では移行期のポイントを整理すると共に、
現行課程にスムーズな移行を果たした熊本県立第二高校の実践を紹介する。

課程の移行期に学校の力を付けるポイント

『VIEW21』では、特集や当コーナーで新課程への移行期にかかわる記事を取り上げてきた。それらを整理すると左図のようになる。制度の変化を学校の指導改善の契機と捉えて、現在の取り組みを見直していきたい。

次ページからは、現行課程移行期に学校としての在り方を問い直し、実践に対する効果検証とそれを基にした取り組みの改善をして軌道に乗せることに成功した熊本県立第二高校の事例を紹介する。

課程移行期のポイント	熊本県立第二高校の実践
SIの見直し・再確認 ＊2011年2月号特集など	● 早朝学習の在り方の検討を通じて、自校のSIを再確認する
生徒の実態を精緻に把握 ● 中学校の指導状況を知る ● 高校入学時の生徒の状況把握を行う（高校入試分析など） ● 面談などをこまめに行い、短いスパンで生徒の変化を把握する ＊2011年6、9月号特集など	● 中学校訪問を行い、入学生の実態を把握して、導入期指導を改善する ● 担任と生徒との面談を充実させ、そこでの課題を学年団や進路で共有する
カリキュラム・指導計画の見直し ● 現行課程の総括 ● 柔軟性のあるカリキュラムを策定 ● 枠組み（カリキュラム）だけでなく、中身（授業）を充実させる方法を検討 ＊2010年2月号特集など	● SIから落とし込んだ３年間の進路指導ストーリーを策定する ● 月ごとの「目線合わせシート」を活用し、教師間で月ごとにすべきことを共有する ● 生徒把握と教師の情報共有を土台に柔軟に指導を改善する
授業・指導の見直し ● 「量から質」への転換 ● SIと生徒把握を基に授業をつくる ● 削られる内容、増える内容を意識して授業をつくる ＊2010年6月号特集など	● 早朝学習に応用的な問題も組み込む ● 「学校としての不得意科目」の基礎徹底のために、進度を調整

実践に対する評価（効果検証）

＊は関連する月号

学校事例

熊本県立第二高校

タイムリーな生徒把握と組織的な情報共有で生徒の変化に柔軟に対応

進学実績の低迷を機にSIの見直しを図る

熊本県立第二高校は、この10年で急速に進学実績を伸ばしてきた。現行課程が施行された2003年に205人だった国公立大合格者数は、09年には過去20年で最高の271人を記録した。この間、生徒数は2クラス分減っていることを考慮すると、同校の変革の成果がうかがえる。

同校が軌道に乗ったきっかけには、SIの見直しがある。クラス減に伴い04年から合格実績が右肩下がりとなり、05年の国公立大合格者数は160人まで落ち込んだ。特進クラスを設けてテコ入れを図ったが成果は上がらず、わずか2年で廃止という苦い経験もした。進路指導主事の石村秀一先生は、当時の学校の雰囲気を次のように振り返る。

「学校規模が大きいこともあり、大きな改革は難しい状況にありました。また、日常の業務も忙しく、どうしても学校全体が前年踏襲の意識から脱却できなかったのだと思います。指導の方向性も学校全体で共有していなかったため、教師によって指導のばらつきがあるという状態でした」

SIの確認は、早朝学習を見直す議論の中で自然と出てきた。早朝学習は、課外を行わずに自学自習の習慣を付け、基礎基本を定着させるために1988年から伝統的に行われていた取り組みだった。しかし、当時は学習量に重きが置かれ、生徒がこなせないほどの量を与えるなど、本来の趣旨とは異なる方向に進みつつあった。

このままの「量」を維持するのか、「質」への転換を図るのか、あるいは両方をバランスよく追うのか。議論を続ける中、話題はいつしか、今後、学校が進むべき方向はどこか、どのような生徒を育てたいのかということに深化していった。月1回の職員会議を重ね、時には生徒を交え、自校の在り方について話し合ったという。

そこで得た結論は、自ら課題を見つけて学べる生徒、自律的に学びに向かう生徒を育てることだった。早朝学習は、自律的な学習態度を育てるために必要という観点から、基礎基本の重視という原点に立ち返り、生徒が身に付けておくべき内容を時間内に終わる分量に精選した。「合格実績が下がっている中で学習量を減らすことは勇気が必要でした。SIを共有していたからこそ、生徒に何が必要なのかという軸はぶれずに指導改善が出来たと思います」と教務主任の前田誠吾先生は振り返る。

熊本県立第二高校
石村秀一
Ishimura Shuichi
教職歴20年。同校に赴任して17年目。進路指導主事。

熊本県立第二高校
前田誠吾
Maeda Seigo
教職歴23年。同校に赴任して14年目。教務主任。

熊本県立第二高校
◎2011年度で創立50年目を迎えた。理数科と、県下唯一の美術科を擁する。2003年からスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を継続して受けている。
◎全日制／普通科、理数科、美術科／共学／1学年約400人
◎2011年度の合格実績（現浪計）◎国公立大は、東北大、東京大、九州大などに280人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大などに延べ406人が合格。

生徒把握に努め導入期指導を改善

教育課程の移行という変化の激

しい時期を乗り切るためには、生徒の実態把握にしっかり努めることが重要だ。

同校は、出来るだけ早く生徒の変化に応じられるよう、入学前から生徒把握に努めている。その一つは中学校訪問だ。同校に入学してくる県内約２００校の一部に教師が手分けをして訪問し、生徒の学力や気質、通学方法などの情報を得ている。また、地域で塾講師をしている卒業生に中学生の実態を語ってもらうこともある。これらの情報を基に、導入期指導に必要な要素は何かを検討し、内容を少しずつ変えている。

「入学直後は緊張感もあり、生徒に指導がよく浸透しますが、逆に導入期指導が緩いと後から厳しい方向への軌道修正を図ることは難しくなります。生徒の変化に応じて、中学生を本校の生徒にする指導が大切です」（前田先生）

中学校時代までに学習習慣が身に付いていない生徒が多いため、入学直後に行う宿泊研修では、ここ数年、学習の仕方やノートの取り方などの指導に力を入れてきた。近年は、友達づくりに不安を感じる生徒の気質を踏まえて、人間関係を育むためのコミュニケーションの時間を多く設けている。

新課程では二極化への対応が鍵になると予測している。学習習慣が身に付いていない生徒には、学習への姿勢を徹底的に指導する、生活習慣が乱れている生徒が多いようなら、入学当初から登校指導や服装指導を強化するというように、想定される変化に応じて指導内容も複数準備しているという。

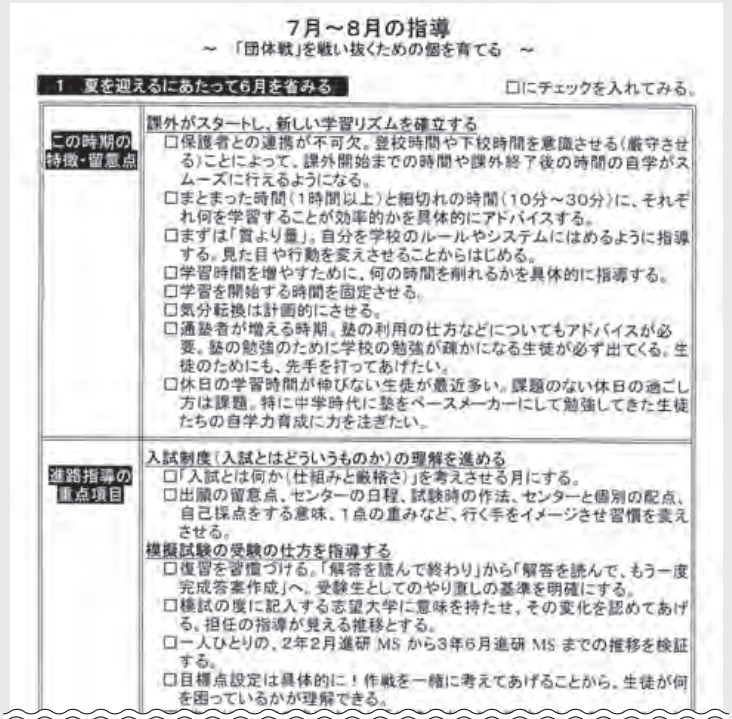
月刊の「目線合わせシート」で教師間の意思統一を図る

生徒把握と共に重視するのは、教師の目線合わせだ。まず、ＳＩに基づいて学校全体を貫く3年間の進路指導ストーリーを構築。学年ごとに毎月の課外活動や試験、進路行事を示し、学年間で指導に差が出ないよう配慮している。

３学年団では、進路指導部から月1回、指導の目線合わせを行うために、その時期に押さえておくべき留意点を記した「目線合わせシート」を配布する（図）。「この時期の特徴・留意点」「進路指導の重点項目」「教科学習指導の重点項目」などが詳細に記されたシートで、担任が達成状況に応じて項目にチェックを入れる形式となっている。いわば月刊の進路指導シラバスのようなものだ。今、担任として何をすべきか、生徒はどのような状態にあるのかということを知ることが出来るため、新任教師の指導力向上にもつながる。

「大学全入時代を迎えたからこそ、一部の教師が進路指導を知っていればよいという時代は終わったと思います。これからは全ての教師が進路指導を出来なければ、生徒全員の受験には対応できません」と石村先生は強調する。

図　目線合わせシート



7月～8月の指導
～「団体戦」を戦い抜くための個を育てる　～

1　夏を迎えるにあたって6月を省みる　　□にチェックを入れてみる。

この時期の特徴・留意点	課外がスタートし、新しい学習リズムを確立する □保護者との連携が不可欠。登校時間や下校時間を意識させる（厳守させる）ことによって、課外開始までの時間や課外終了後の時間の自学がスムーズに行えるようになる。 □まとまった時間（1時間以上）と細切れの時間（10分～30分）に、それぞれ何を学習することが効率的かを具体的にアドバイスする。 □まずは「質より量」。自分を学校のルールやシステムにはめるように指導する。見た目や行動を変えさせることからはじめる。 □学習時間を増やすために、何の時間を削れるかを具体的に指導する。 □学習を開始する時間を固定させる。 □気分転換は計画的にさせる。 □通塾者が増える時期。塾の利用の仕方などについてもアドバイスが必要。塾の勉強のために学校の勉強が疎かになる生徒が必ず出てくる。生徒のためにも、先手を打ってあげたい。 □休日の学習時間が伸びない生徒が最近多い。課題のない休日の過ごし方は課題。特に中学時代に塾をペースメーカーにして勉強してきた生徒たちの自学力育成に力を注ぎたい。
進路指導の重点項目	入試制度（入試とはどういうものか）の理解を進める □「入試とは何か（仕組みと厳格さ）」を考えさせる月にする。 □出願の留意点、センターの日程、試験時の作法、センターと個別の配点、自己採点をする意味、1点の重みなど、行く手をイメージさせ習慣を変えさせる。 模擬試験の受験の仕方を指導する □復習を習慣づける。「解答を読んで終わり」から「解答を読んで、もう一度完成答案作成」へ。受験生としてのやり直しの基準を明確にする。 □模試の度に記入する志望大学に意味を持たせ、その変化を認めてあげる。担任の指導が見える推移とする。 □一人ひとりの、2年2月進研 MS から3年6月進研 MS までの推移を検証する。 □目標点設定は具体的に！作戦を一緒に考えてあげることから、生徒が何を困っているかが理解できる。

面談のポイントや生徒の状態、教科学習の重点項目など、時期に応じた指導のポイントが網羅されている。担任間の目線合わせのみならず、若手の指導力向上にも一役買っている　＊学校資料をそのまま掲載

進路と学年の意思疎通を進路指導部会で図る

進路指導部の意向を学年に浸透させるための組織体制の構築も強化する。その中心となるのは進路指導部会だ。従来は進路関係の行事日程を連絡する場だったが、今はそれに加えて、直近の進路指導・行事について学年団からの報告と、学年間のノウハウの共有も行っている。例えば、11年5月の部会では、スタディーサポートの結果を受けて立てた学年ごとの対策や、6月のマーク模試に向けた指導方針などを発表し、その上で取り組みに関する疑問や課題について、学年を超えて指導案を出し合った。

方針として決定した事項は後日学年会で発表し、担任団で意思疎通を図るのである。進路指導主事→各学年の進路指導部→各学年担任団という指示伝達のステップを踏み、更にその指導が生徒にどう響いたのかを担任から吸い上げるというサイクルを回すことで、進路指導部と担任団の目線合わせがスムーズになった。

進路指導部と学年団の結節点になるのが学年リーダーだ。進路指導部員の中から各学年担当一人を選出し、学年主任とは別に、それぞれの学年の進路指導の取りまとめを担う。

「教師一人ひとりが当事者意識を持つためには、各学年が自分たちで考え行動することが重要です。進路指導部からの指示で動くのではなく、学年リーダーから担任団へというように学年の中で横に広げていくことで、活力ある組織を生みだせると考えています」（石村先生）

担任、学年団、進路指導部がタイムリーに生徒情報を共有

生徒の変化に応じて指導をフレキシブルに改善できるのも、生徒把握と教師間の情報共有がスムーズに出来るからだ。

まず、担任が面談や生徒との会話などから日々の生徒の状況を把握する。その中で、担任は気になる生徒について前述の進路指導部会や学年会で報告。それを受けて進路指導部や学年団がしかるべき対策を練る。生徒から担任へ、担任から学年や進路指導部へという「二段階の吸い上げ」がポイントとなる。

日々の生徒の変化を捉えるアンテナの役割を果たすのは、担任と生徒の面談である。前述の「目線合わせシート」によるチェックも、担任に生徒との面談や会話を促し、生徒の変化をいち早くキャッチするためでもある。変化を即座に捉える情報収集・分析能力、それを指導に反映させる組織の機動力と柔軟性が、変動の激しい新課程への移行期を乗り切る重要なポイントになるのである。

こうした日々の生徒把握と教師間での情報共有は、教科指導の改善にもつながっている。例えば早朝学習は、ここ数年、基礎基本の定着という目的に沿って基礎的な問題を取り上げてきたが、最近は発展的な問題も入れて成績上位層の意欲も喚起している。これは、学力層の拡大という現状を踏まえ、全ての層を引き上げる指導を実現したいという思いからだ。

また、数学では模試分析の結果、特定の分野で基礎が未定着であることが分かった。そこで、これまでは出来るだけ早く教科書を終え、残りの時間は演習に当てていたが、今年から1週間のうち1コマを復習の時間とすることにした。

「『量から質へ』という議論は現行課程への移行期にもなされました。当時は量と質は相反する概念だと考えていましたが、今回の課程では『量の中から質を出していきたい』と思っています。量は否定せずにそこからいかに効率的に質の向上を図るか、検討を進めたいと思います」（石村先生）

「少しでも歯車がかみ合わなくなったら、どんどん悪い方に向かってしまうという危機感は常にあります。だからこそ、先生方を巻き込んで、学校全体で生徒にぶつかっていかなくてはなりません。教師一丸となって10年先を見据えた第二高校をつくっていくという気持ちで、新課程に臨みたいと思います」（前田先生）

今号の視点

学生の主体性を引き出す学びの環境を用意する大学・学部

実践的なテーマをチームで解決していく課題解決型授業（PBL）を取り入れる大学は増えている。中には、学生の主体的なコミュニケーションや創造性を引き出すような学習環境を整える大学もある。具体的にどのような工夫を凝らしているのか、二つの事例を紹介する。

PBLが広く浸透し環境整備に踏み込む大学も

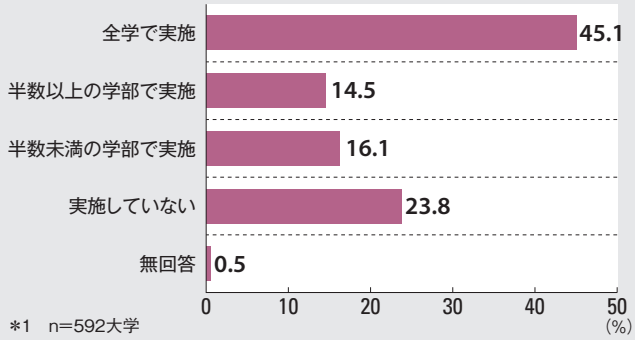
当コーナーでは、公立はこだて未来大や立教大経営学部（2010年9月号）など、課題解決型授業（PBL）を取り入れる大学を紹介してきた。PBLは講義や演習で学んだ知識や理論を生かしながらチームで課題を解決していく学習方式で、10年に読売新聞社が実施した「大学の実力」調査によると、約76％の大学が何らかの形で実施している（図）。

PBLが一般的になりつつある中、効果的な実践が出来ているかを判断するには主に二つの観点がある。一つめは、ディプロマポリシー（学位授与の方針）やカリキュラムとの連動だ。PBLが特定科目だけで実施され、カリキュラム全体との関連が薄い場合もあるからだ。二つめは、学生にPDCAサイクルを回させ、振り返りをしっかりさせているかだ。良い成果を出すだけでなく、次の学びにつなげることがむしろ重要だ。

こうしたカリキュラムや授業内容などソフト面の充実を前提としつつ、今号は「学習環境」というハード面の整備を進める大学を紹介する。「学生の能動的な学びを促すために学習環境も工夫する必要があるのではないか」という問題意識の下、取り組みが始まっているからだ。代表例として、東京大「駒場アクティブラーニングスタジオ」や公立はこだて未来大のキャンパス設計などが挙げられる。

より効果的な学習環境とはどのようなものか。「設備の有無」だけでなく「どう学ぶか」まで掘り下げて取り組んでいる事例を紹介する。

図　PBLの実施状況



＊1　n=592大学
＊2　データは、『大学の実力2011』（中央公論新社）の巻末の表より編集部で作成

自由なアイデアや発想を促す「プロジェクトラボラトリ」を開設

九州工業大
工学部総合システム工学科

◎課題意識と狙い

福岡県北九州市にある九州工業大は08年度、ＰＢＬを教育の柱に据えた「総合システム工学科」を工学部に開設した。機械工学と電気電子工学を中心に、複数分野を学べる学科だ。背景には工学教育の質的転換の必要性があったとＰＢＬ教育推進室長の中尾基准（もとい）教授は説明する。

「本学は国立の工業系大学であり就職実績は高いのですが、近年、学生のコミュニケーション能力や自主性には課題が見られるようになりました。理工系教育では知識や技術の伝授が第一の使命ですが、これからは学生一人ひとりに適した学習法やコミュニケーション能力を身に付けさせるようにすることも重要な使命になると考えました」

従来は3年次までは知識の習得が中心で、4年次から研究室に入って主体的な学びが始まっていた。しかし、もっと早い低学年の段階で「正解のある勉強」から「解のない学び」へと転換させるべきだという問題意識があり、そのような教育を行う総合システム工学科の開設に至った。

◎取り組み内容

ＰＢＬを軸とする工学教育を展開するに当たり、同大はカリキュラムと教育・学習環境を両輪として整備している。

カリキュラムの特徴は、ＰＢＬ科目を1～3年次までの全ての学期で必修にしている点だ。しかし、理系学科では専門分野の土台となる知識量が多く求められるため、ＰＢＬ科目は、学生が週約20コマ受ける授業のうち2コマ、約1割にとどめている。この程度なら基礎学力も十分に付けつつ、ＰＢＬに取り組めるという判断だ。

ＰＢＬでは、5人程度のチームを組み、課題設定から実施計画立案、プロジェクト実行まで学生主体で進めていく。1～2年次は半期ごとにテーマを設定してプロジェクトを行い、コミュニケーション能力やプレゼンテーション能力を高めていき、3年次には通年の総仕上げ的なＰＢＬ科目がある。

こうした活動の拠点として整備したのが「プロジェクトラボラトリ」だ（**写真1**）。教員から伝達される知識を学生が学んでいく従来型の教室とは対照的に、ディスカッションしたりアイデアを出し合ったりという、アウトプットを主眼にした空間が、人間工学の観点に立ってデザインされている。従来の大学の教室が均質な空間なのに対して、プロジェクトラボラトリは照明や設備なども考えられており、どこを切り取っても色やデザインが異なる不均質な空間になっている。

ここでの授業における教員の役割は、学生同士が自由に議論してプロジェクトを推進していくのを側面から支援することだ。特に、3年次のＰＢＬ科目では、何をどうするのか全面的に学生に任せているという。

プロジェクトラボラトリは、ＰＢＬ科目以外の授業でも使われている。総合システム工学科4年の山下真紀さんは「学生同士でアイデンティティーについて話し合う人文系の授業を履修しました。初回は一般の教室で行いましたが、講義用の教室では学生が前を向いて座るので議論は盛り上がりに欠けました。そこで、2回目からラボラトリを使うようにしてもらったところ、学生が互いに顔を合わせやすく、意見も言いやすくなりました」と語る。

写真1　プロジェクトラボラトリはオープンスペースで、さまざまな形の椅子は、移動が自由。自分のお気に入りを持って集まり、話し合うこともある

◎成果と課題

これまでの4年生と比べて、ＰＢＬを取り入れた今年の4年生は能動的だと中尾准教授は感じている。

「以前は多かった『どの本を読めばよいですか』『何を勉強すればよいですか』といった質問が減り、自分で何かをやろうという姿勢が強くなったと思います」

学生はＰＢＬを行う際、議論を交わす必要があればプロジェクトラボラトリに集まり、調べものやインプットに集中したい時には図書館に出向くなど、意識して学習場所を使い分けているという。

同学科は今後、ＰＢＬ教育を他学科、更には他学部へと浸透させていく役割を担う。ＰＢＬの指導は教員のコマ数も増え、授業スタイルの転換も求められるため負荷が大きくなるのが課題ではあるが、プロジェクトラボラトリを使うことによって具体的に授業や学生の行動がどう変わったのかも検証していく考えだ。

いつでもどこでもＰＢＬが出来る校舎を丸ごとデザイン

甲南大 マネジメント創造学部

◎課題意識と狙い

甲南大は、09年度、ＰＢＬをカリキュラムの柱にした「マネジメント創造学部」を新設した。与えられたことをこなす受け身型でなく、自ら課題を見つけて掘り下げ、解決していく人材育成を徹底して行うためだ。

井上明教授は、「一人で取り組む勉強ももちろん大切ですが、仕事が一人で完結することはほとんどありません。そこで、新学部ではＰＢＬをカリキュラムの中心に据えました。これまでの大学教育の枠組みや既成概念にとらわれず、私たちが目指す授業の形からカリキュラムを考え、そのための学習環境を設計していきました」と説明する。

◎取り組み内容

同学部は、1学年の定員１８０人に対して専任教員を16人配置した。校舎には1学年全員が入れる大教室は一つしかなく、残りの教室はそのほとんどが最大でも50人程度が収容できる大きさの教室ばかりだ（**写真2**）。机と椅子は全て可動式のものを配置し、講義形式、グループワークなどの授業形態に応じて自由にレイアウトを変更できる。デザインや色は教室によって異なり、壁が全面ホワイトボードになっている教室もある。更に、教室や教員の研究室はガラス張りのオープンな造りとし、教員に相談したり、議論の輪に加わってもらったりしやすい環境にしている。

教室以外にも、学生が集まって議論や学習できる机と椅子があるオープンスペースが随所に設けられている。校舎内のどこにいても、いつでもすぐに議論できるような環境になっているのだ。

校舎内では全ての場所で無線ＬＡＮへの接続が可能だ。学生は一人1台のノートパソコンを携帯している。マネジメント創造学部3年の安井礼央奈さんは、「プロジェクト科目では、学内ＳＮＳ（＊）にチームのファイルが置いてあり、授業時間以外でもメンバーが修正を加えながら作業を進めていきます。一方、アイデアを出す時は、必ずメンバーが集まって話し合っています。顔をつき合わせて話さなければ、良いものは生まれないと思います」と語る。

1年次にはＰＢＬの授業を受けるための基礎リテラシーを学ぶ科目があり、文献の探し方や文章の書き方、プレゼンテーションの仕方を習得する。

そして、2年次からＰＢＬ科目が始まる。ＰＢＬ科目は半期ごとで、約20テーマの中から選び、4年次までに5教科履修する。テーマは、環境エネルギーから企業経営、マーケティング、国際政治経済まで幅広い。講師の倉本宜史（たかし）氏は、「授業の進め方は大学院での方法と似ていると思います。ＰＢＬの授業で学生と教員が議論しながら成果物を作成していき、足りない知識は専門科目の受講と自学自習で補うというスタイ

写真2　教室の形態はさまざま。壁一面のホワイトボードや自由に動かせる机を利用して議論する

＊ Social Network Service の略

学生VOICE

PBL用の教室でアイデアが深まるのを実感

九州工業大工学部
総合システム工学科4年
西浦秀和
（山口県・私立高水高校卒業）

3年次にある通年のPBL科目では、6人でチームを組み、「最先端の技術を切る」というテーマでスマートフォンのタッチパネルの技術を調べました。タッチパネルに使われている技術はさまざまで、まず6人で分担してそれぞれ調べ、結果を持ち寄って議論するという方法で進めました。議論やアイデア出しの時はプロジェクトラボラトリに集まり、調べものの時は図書館に移動するなど、内容によって場所を変えました。目的に応じて教室を使い分けることで、年度末にある発表会に向けて効率よく準備を進められました。

3年次には1年間を通してPBL科目をラボラトリで行いましたが、1・2年次では普通の教室で行うPBL科目も経験しました。普通の教室ではかしこまった気持ちになるのに対し、リラックスできる椅子などがあるラボラトリの方が良いアイデアが出やすいと感じました。私もそうですが、多くの学生がラボラトリのお気に入りの椅子に座りながら考えを深めることが出来ていると思います。

プロジェクト科目を通じて自ら学ぶ姿勢が身に付いた

甲南大マネジメント創造学部
マネジメント学科2年
北本彩花
（大阪府・私立関西大倉高校卒業）

大学というと大教室での一斉授業を想像していましたが、この学部では少人数で議論したり、企業へのプレゼンテーションがあったりと、従来とは異なる新しい学び方が出来そうだと感じて、入学しました。

プロジェクトをより良いものにしていくためには、先生や他の学生にアドバイスを受けながら、自分で考え、自発的に動く姿勢が必要になります。課題意識をしっかり持っていなければプロジェクトを進めるのは難しいため、自然と考え、学習を深められるようになりました。他の授業も少人数教室で行われ、1年次から2～3週間に1回くらいの頻度でプレゼンテーションする機会があるので、徐々に慣れていきました。

授業後も22時ごろまで大学で勉強しています。友達とお気に入りの教室に集まったり、集中したい時は図書館に行ったり。他大学の友人に話すと、「そんな遅くまで大学が開いているの？」と驚かれることもあります。中高時代よりも今の方が勉強量は増えました。

ルです」と説明する。

◎成果と課題

教室は、授業時以外は基本的に自由に使用できる。学生にはそれぞれお気に入りの教室があり、空き時間などにメンバーで集まり、学習などに利用している。定期試験後には、ホワイトボードを使いながら、試験内容について議論を深める学生もいるという。校舎は23時まで開いており、夜遅くまで学習する学生も少なくない。上級生のそうした姿を見て、下級生も自然と学内で自習する習慣が付いていくという。

学部設置3年目となり、課題も見えてきた。井上教授は、「グループ学習に適した場はたくさんありますが、個人で集中して学習する場も必要だということが分かりました」と話す。また、現状のカリキュラムは科目選択の幅が広いため、学生の目的意識に合わせた履修指導を行っていくことも考えている。

進路指導に生かす

環境の整備や運用から見えてくる教育姿勢

大学を選ぶ際、最優先となるのは「何を学びたいか」だが、学ぶ内容は似ていても、学び方は大学によって異なる。学生の主体的な学びを引き出すために、カリキュラムや授業の進め方を工夫しているかという観点で確認する必要もあるだろう。

今号で紹介した二つの学部・学科以外にも、教室の壁が全面ホワイトボードだったり、机や椅子などの備品を学生が自由に配置できたりといった工夫を行う大学・学部はある。学習環境の整備は、教員個人ではなく大学・学部の組織的な取り組みが必要であるだけに、大学・学部の姿勢が浮き彫りになるともいえる。

また、実際に足を運んで学習環境を目にし、運用方法まで確認できれば、学生がどのような生活を送っているかも推し量れるのではないか。生徒が大学を見学する際には、単に設備の新しさだけでなく、学生が実際に活用する様子を確認するように伝えておきたい。

ご意見・ご感想をお寄せください

◎今回の内容に関するご感想やご意見、今後取り上げてほしいテーマなど、編集部にお寄せください。

e-mail:
view21_since-1975@mail.benesse.co.jp

読者のページ

VIEW'S SQUARE

Volume 3

教育最前線からのホットな話題を紹介します

中学校の学習指導を踏まえ、導入期指導を再考

本校でも入学直後に学習オリエンテーションを行っている。しかし、それは教師が中学校での学習方法を十分に理解せずに、「高校での学習方法はこれだ。早く高校生になろう！」と声を掛けているに過ぎないと思い始めていた。9月号の特集を読み、そのことを確信した。高校側も中学校での学習方法の良いところを取り入れた授業を展開すべきだと強く思った。

［広島県広島市立沼田高校・正木勝治］

中高接続が話題となった背景は何か

9月号の特集は、6月号に続き、中高接続がテーマだったが、全国どこでも教師の課題意識は共通していると感じた。全国の教師が中高の接続についていろいろ考えているということは、裏返せば、スムーズな中高接続の難しさを示すものであろう。中高接続は、ここ十年ぐらいで話題に上ることが増えたのではないか。その背景を考えることが大切だと感じた。

［秋田県立能代高校・柏谷浩樹］

改革に不可欠な要素は、新たな視点と前向きさ

9月号「指導変革の軌跡」の埼玉県立浦和西高校の事例を興味深く読んだ。本校にも生徒の自主性尊重を口にし、地域から「生徒を伸ばしていない」と批判されても何も思わない教師もいる。赴任歴の浅い教師を1学年団に編成し、十分な準備期間を当てて改革に取り組んだことは参考になった。前例踏襲ではなく、新たな視点で前向きに取り組もうとする体制づくりは改革に不可欠の要素だと改めて感じた。

［和歌山県・匿名希望］

指導にためらいがあったが記事に背中を押された

9月号「生きたデータの徹底活用」の「現場からのアドバイス（プラスαの指導）」で「誤答が多い模試の問題を定期テストに組み込む」の記述を読み、「やはりやらなければ」との思いを強くした。定期テストに組み込むには、模試を分析し、生徒に誤答問題に再度取り組むように指示し、その上で問題の解説をするという過程が必要となる。3年生になると模試の回数も増えて大変だが、二の足を踏んでいた自分自身の背中を押してもらった気がした。

［東京都立北園高校・鈴木公美］

生徒に「分からない」と感じさせる授業の大切さ

9月号「30代教師の『転』『起』」の平山成樹（なるき）先生の記事を読み、「分からない」と感じさせる授業という言葉に共感すると共に、常に自分の頭の中に置いておこうと思った。教師は、「分かる」ことが大切だと考えて授業を行うが、それは結果として生徒が感じることであり、教師が先回りして教え込むことではない。そこに、教師側の勘違いが生じることを私自身も体験した。生徒自身が、考え、悩み、求める授業を展開していくことの大切さを再認識させられた言葉だった。

［兵庫県立加古川北高校・林宏樹］

教師川柳

きっとやる　期待し続け　3年間

愛媛県・偏差値メタボ

お知らせ

文部科学省が
被災地の学校と提供者を結ぶ
マッチングサイトを開設しています

「東日本大震災　子どもの学び支援ポータルサイト」

http://manabishien.mext.go.jp/

編集後記

6月号と9月号で「中高接続」をテーマに特集を組みました。こだわったのは「連携」ではなく「接続」という点です。「一人の生徒の成長」という視点で見た時に、中学校と高校の指導はどのようにつながれていたらよいか、取材を通して課題がたくさん見えてきました。難しいテーマではありますが、今後も誌面を通じて深めることが出来たらと考えています。先生方の考える「中高接続」の形も、ぜひ教えてください。（小林）

VIEW21 10月号 Vol.4　2011年10月19日発行

発行人　新井健一
編集人　原 茂
発行所　（株）ベネッセコーポレーション　Benesse教育研究開発センター
印刷製本　（株）ビーヴィオコーポレーション
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　中丸満、二宮良太、山口慎治
撮影協力　坂井公秋、南弘幸、ヤマグチイッキ
イラスト協力　山本重也

VIEW21編集部
〒163-0411　東京都新宿区西新宿2-1-1　新宿三井ビルディング13階
電話　03-5320-1287
©Benesse Corporation 2011

VIEW21　2011 December 12月 Volume 5
次号は 11月25日発行（予定）
『VIEW21』高校版は年6回の発行です